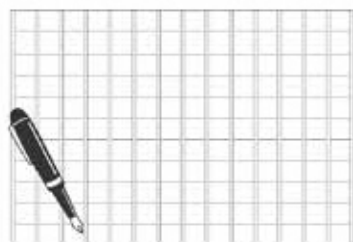


第11回ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



刊行に当たって

本県は、全国の都道府県に先駆けて、平成二十二年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、平成二十六年には十一月一日を「県民読書の日」と定めました。

この記念事業として創設された「ふるさと秋田文学賞」は、国内外の方々に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることを狙いとし、秋田の自然や文化、風土、人物などを題材に描かれた小説やエッセイなどから優れた作品を選考し授与しているものです。

第十一回を迎えた今年度は、全国から過去最多の百五十五編の御応募を頂きました。作品を応募された皆様には心から感謝申し上げますとともに、多くの皆様に親しんでいただける文学賞として定着していることを誠にうれしく感じております。

小説の部には、現代小説のみならず、時代小説やファンタジー小説など様々なジャンルの作品が、また、エッセイ・紀行文の部には、秋田で過ごした実体験をもとにした作品が数多く寄せられました。題材としての秋田の用い方も、観光地や名物といったなじみ深いものから独自の感性や視点で秋田を捉えたものまで実に多様であり、秋田の魅力が様々な角度から多彩に描かれるようになりました。

読書には、他者の考え方や価値観に触れることにより想像力を養い、視野を広げるなど、豊かな人間性を育むための大切な役割が期待されます。

今後も、県民の皆様が、日々の暮らしの中で読書に親しみ、じっくりと活字に触れ、心豊かな人生を送ることができるよう、読書活動の推進に更に力を注いでまいります。

令和七年三月

秋田県観光文化スポーツ部長 石 黒 道 人

目次

第11回ふるさと秋田文学賞 小説の部

◇ふるさと秋田文学賞

彩生さいせいの祈り

受賞者のことば

北原

岳・
・
・
・
7

◇ふるさと秋田文学賞佳作

星をあつめて

受賞者のことば

矢部

郁・
・
・
・
49

第11回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

◇ふるさと秋田文学賞

男^お鹿^がっ子ナマハゲ論

受賞者のことば

笹
リ
ン
・
・
・
・
91

◇ふるさと秋田文学賞佳作

学校

受賞者のことば

鹿
住
敏
子
・
・
・
・
105

■ 選評

タイトルからが作品です

画竜点睛

もつとパッションが欲しい

内 館 牧 子 ・ ・ ・ 120

塩 野 米 松 ・ ・ ・ 124

橋 本 五 郎 ・ ・ ・ 128

■ 一次選考委員寄稿

完成と未完成

柴 山 芳 隆 ・ ・ ・ 132

■ 秋田県の読書活動推進施策

・ ・ ・ ・ ・ 137

■ 作品募集要項・実施状況

・ ・ ・ ・ ・ 141

第11回 ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞

彩生さいせいの祈り

北原

岳・作

彩生の祈り

想像してみる。

とても小さな想像。あの人との幸せな将来。

手にもった文庫本をテーブルに置く。

窓からさしこむ光に誘われ、そつとひと呼吸おいてから、外に目をやった。風の音が聞こえる。庭の木々が揺れ、風の波に葉が舞う。自然はいつまでもつづいていく、と思う。父が作った小さな池には、旭川あさひがわで釣ってきた魚たちが泳いでいる。ときどき、野良猫が真剣な目をして、池をにらんでいる。

想像してみる。

数年後、私は師範学校を卒業して、先生になっている。教室にあつまる生徒たちに勉強と、それから生きることの大切さを、教えている。

冬の間に、東京と大阪が空襲を受けた。あるとき、学校で読んだ新聞には、「帝都市街を盲撃／約五十機に損害／十五機を撃墜す」と書かれていて、でも、まだまだ祖国は大丈夫だつて、必死に自分に言い聞かせた。「汚れた顔に輝く闘魂」の文字。女も男も関係なく、目の前の戦争に最後まで対峙して、勝利をあげて考えるべきだ、とつよく思った。

想像してみる。

戦争はいつか終わる。そのとき、私はあの人と一緒に教壇に立ち、未来を担う生徒たちの輝く瞳に感動しているかもしれない。でも、生徒たちの瞳の輝きなんて、それはほんとは普通のこと。戦争が終わったなら、日常が戻ってくる。日常が当たり前前に輝けるよう、私は生徒たちに国語を教えていく。

そんな想像をしてみるのが私の小さな幸せだった。

師範学校にもやつと桜が咲き始めた。

明治四十二年に開学した秋田県女子師範学校は、昭和十八年の「師範教育令中改正ノ件」の公布によって、秋田県師範学校と統合されて、秋田師範学校に名前をかえた。

私は二年生になった。あの桜と同じく、美しく清楚でありたいと思いつつ、でも芯のある教師を目指してこうとつよく思った。

そして、私にそう思わせてくれたのは、一年生のときに知り合ったあかりだった。

そういえば、あれは彼女とはずいぶん親しくなったころ、先輩たちの卒業式が迫っていた三月の寒い日だった。大都市の空襲の報に、強い国民であらねばならないことを再確認した、と私が口にしたときのこと。あかりは言ったのだ。「私は生きていたい」と。

教室には私たちふたりしかいなかった。そつと手をさしだしたのは私だった。あかりの手は、教室の寒さに呼応して、とても冷たかった。

「大丈夫よ」私は言った。

あかりは、私の目をそつと見つめた。瞳の奥から、暗い波^は涛^うの怒号が聞こえてくるようだった。

「そうだよね」でも、あかりは、やさしくそう言った。

本当は分かっている。私の言った「大丈夫」に根拠なんてないことを。

この国の主要都市が空襲を受けている。男子部の生徒たちは、いますぐにでも戦場へ乗り込むのだと大騒ぎしては、敵のことを鬼畜米英と罵倒した。軍事訓練の厳しさ、手にもたされる竹の武器でどう戦うのだろう、と素朴に疑問に思った。

それでも、新聞やラジオで語られる空襲は、まだまだ遠くの出来事だった。町を覆う激しい炎を想像することはしたくない。この町の歴史のある建造物やたくさんのお神社が焼失するなんて考えたくもない。

それでも、皆で大声をあげて、気合いだけが試される訓練を受ける度に心が揺れる。

戦争の足音は、耳にこびりついていたし、避けられないことは分かっていた。

だから、私は先生になることだけを考える。

私と同じ思いをもつあかり。彼女と話すのは楽しいし、頼もしい。

「芥川龍之介は面白いのよ。『鼻』はすごい作品。笑っていいことを素直に笑って、そこから何かを考える授業がしてみたいな」あるとき、あかりは言った。

国語及び漢文の授業を担当する秋山先生は、生徒の未来に笑顔をつくれ、とおっしゃる。物を読むことは字面の問題ではない、行間の向こうに、精彩に富んだ本当のことがある。私たちは教師は、暗い時代だからこそ、文章を読む楽しみを教えなければならぬ。戦争に関することだけではない、この国にはたくさんさんの「文学」がある。作品に耳を傾けられる、心の豊かさを育む、それを目指して教壇に立て。

戦争は日常のなかにはいりこんでいた。外地で戦う兵隊さんの苦勞を知り、思いを込めた贈り物をする。戦争に勝てば、世界はいまよりずっと素敵になる。そういうことばかりを考える日々に、秋山先生の言葉は深い輝きを放っているように思えた。あかりも、先生の言葉を素直に受け取っていた。

放課後、どんな先生になりたいか話すときがある。良い先生になる。でも、どんな良い先生になるの？ 秋山先生が言うように、生徒に心の豊かさを教えられる先生になりたいと話し、

私とあかりは笑顔になる。そんな思いを共有することが、私たちの未来に力を与えてくれた。

あかりに出会ったのは入学式の日。

教室の全員が簡単な自己紹介をした。市内や近隣からの生徒がほとんどだった。あかりは、父を北支派兵のとき亡くしており、母方の実家を頼って秋田に越してきた、と言った。生まれは東京だけれど、ここでの生活にはもう慣れている、と秋田の訛^{なま}りをまじえて笑顔で言ったのをいまでも覚えている。当たり前だけれど、あかりも先生になることを夢見ていた。

梅雨のころ、男子部と女子部合同の開校記念式が行われた。秋田県師範学校と女子師範の統合二周年を祝う式典だった。その準備がすすむなかで、私はあかりと親しくなった。

きっかけは、図書室。私は準備の合間、すこしさぼるつもりで図書室の扉を開いた。

その図書室に、ずいぶん古い本を熱心に読んでいるあかりを見つけた。

図書室は静寂につつまれていた。大きな机に向かって、何人かの生徒が一生懸命に読書をしている。分厚い本の背表紙には、何とか心理学なんて書かれていて、授業についていくのがやっとだった私には手に負えないものと思えた。

あかりに声をかけるのは憚^{はば}られた。彼女は夏目漱石の本を読んでいて、机には他に雑誌が数冊置かれていた。

すると、ふいにあかりと目が合い、そのとき、彼女がそっと微笑んだ。私は急なことに、呼吸を忘れ、後ずさってしまった。気を取り直して、小さく頭を下げた。あかりが応じた。私はほっとして、勇気を出して彼女の向かいに腰かけた。

最初に何を話したのだったか。もう覚えていない。でも、それは私たちの不幸ではない。静かに流れる時間のなかに取り込まれ、揺らめいているような感覚。彼女の肩に寄り添いながら、目を閉じているときの幸福。そういう思いが膨らんでいくなんて、もちろんそのときは思ってもみなかったけれど、やがて私はあかりのことを心の底から信頼するようになっていった。

「あおさんは、どんな本が好きなの？」話をするようになって間もないある日、あかりが尋ねた。

「ううん、本当はね、これが好きって本や作家はいないの」

「ふうん。じゃあ、これはどう？ 太宰治」

「太宰治って、経済の大矢先生がひどく批判していたよね、不謹慎で怠惰だって」

「そんなことないわ。あおさんは、実際に手に取って読んでみた？」

「……読んでない」

「先生って職業はね、ただ伝聞したことを吹聴するだけではダメなものだと思う。本当のことは案外、見えやすい場所にあるのだから。まずはほら、これなんてどう？」あかりはそう言う
と、書棚から『女生徒』を取った。

「女生徒……？」

「表題作も面白いわ。少女のもつ自意識についてこの作家は向き合っている。でも私が好きなのは『黄金風景』。あいまいな記憶について書かれた内容の向こう側に、この作家のやさしさが見える気がするの。小さいころ、女中さんにね、嫌な思いをさせたとずっと思っていたけれど、実はね、彼女は語り手を信頼していた。見て。この作品はね、『負けた。これは、いいことだ。そうなければ、いけないのだ。かれらの勝利は、また私のあすの出版にも、光を与える』って終わるの。ほんの小さなことだけれど、人はね、またいつだって生き直せるってことなんだと、私は思う」あかりは、話した。

「面白いわね」圧倒された私は、それだけしか言えなかった。

「面白いのよ！　ねえ、あおさん、不謹慎って何？　先生のおっしゃることがすべてではない

わ」あかりはそう言うのと、「それにね、秋田には石川達三がいる」と言つて『蒼氓』という本を渡してくれた。「ブラジルに移民する人たちの苦しみに向き合つた作品。ぜひ読んでみて」

「ありがとう」そう言つて本を受け取るとき、あかりの手にふと触れた。とても暖かかった。

本が好きで、読みながらいろいろなことに思いを馳せるあかりを知つた。楽しそうに話す彼女を見ているのが、なぜだろう、私にはとても嬉しいことだつた。

その日の帰り、校庭の横の小道をあかりと一緒に歩いた。

「さつきは私ばかり話しちゃつた。ねえ、あおさんはどうして先生になろうつて考えたの？」あかりが尋ねた。

「私はね……」どうしてだろう。父親が小学校の先生だつたから、だろうか。年の離れた弟、それから妹に何かを教えたいなんて思つていたのだろうか。

尋常小学校のとき、私はノートに落書きをしながら、ふと眠気に負けてうとうとしてしまつたことがある。国語の菅野先生は、机間巡視をしながら、眠りの淵にいる私に気が付いたのだらう、トントンと肩をたたいた。

「松岡、まだ夜じゃないぞ」そう言つた後、ノートの落書きに目を落として「良いものを書くね。素敵だ」とおっしゃつたのだつた。

私は自分の落書きを読み直した。「まつばつくりのかたさになわなない弟の怒った目」とか「かげがさしこんでもすずしくならない夏の校庭」とか、そんなことをつらつらと書いていた。たったそれだけの文章だったけれど、私は様々なことを考え、様々に思いをさせて落書きをした。そんな私の落書きを、厳しいだけだと思っていた国語の先生が褒めてくれた。たぶんそれがきっかけなのかもしれない。思いを言葉にすることを認められた、大げさに言えばそういうこと。だから、私もそうやって生徒を認めてあげられる先生になりたい。私はあかりに、記憶の断片を話した。

彼女は楽しそうに笑った。それから、鞆かぼんをもたない私の左手をぎゅっと握って、私たちは絶対に先生にならなければいけないわ、とすこし興奮しながら言った。

私の心があかりの方へ動いていくのが分かった。

それははじめての心の動き方だった。揺れながらふわふわと舞っているような心もち。同時に心がぐっと強くなっていく感覚。私は彼女のことを好きになっていた。

先日、すこし年上の幼馴染だったえいこが結婚した。

相手は遠い親戚にあたる青年だった。彼はすでに出征が決まっていた。面識のなかった二人は、親や仲人の敷いた道の上を歩かされる。だけど、ぜんぜん不幸には見えなかった。幸せそ

うな笑顔を浮かべて、写真撮影にのぞむえいこは、祖国のために戦う兵隊さんを支える重要な責任を担いながら、同時に新婚のふんわりした空気を味わっているように思えた。

彼女はやがて母親になり、その子どもたちは必ず御国に貢献する。

私たち師範学校の生徒は、そう遠くない将来、先生になってえいこの子どもたちを教育していく。勅語が示す国民の在り方を軸に、決して間違った道へ進まぬように。

そういうことが当たり前だと思ってきた。

あかりは、小さくて、でも美しい彩りのある宝石をもっている。それは心の奥に、静かにしまわれている。そして、それは絶対に輝きを失わない。

これから先、どんな困難があっても、あかりの宝石の輝きは、きつとひとつの行き先だけを示したりしないはずだ。そしてもし私がつらい場面に直面したのなら、私が進まなければならぬ方向へ導いてくれるかもしれない、と私は思ったりもした。

学校の帰り、羽州街道^{うしゅうかいだう}を歩いて、あたりの高台を訪れることがあった。

よく晴れた日はもちろん、すこしぐずついた天気の時でも、傘をさして歩くのは楽しい。

ときどきは旭川のほとりを、とりとめのない話をしながら行く。鳥のさえずりや川のせせら

ぎを聞いていると、違う世界に來たような錯覚をしてしまう。

樹木が揺れ、光がさしこむ。

「勉強の時間を奪っちゃってごめんね」私は言う。

「あおさんという時間、私は好きよ」あかりが答える。

「私も」

そんな会話が自然にできるようになったのは、一年生の夏ごろだったと思う。ふたり一緒にいることが当たり前になり、河原や芝生なんかで肩を寄せて座るのも変だとは思わなくなっていた。

——クラスでいちばん頭のいい、しゅうこさんに恋人ができたと言われた。目ざとい友人たちは、しゅうこさんに、いちいち真相を尋ねて、ついに「恋人ができた」という言質をとった。

しゅうこさんは照れながら、彼の名前を告げた。男子部の生徒、加藤某君の兄であるしんいち氏。しゅうこさんにとっては、幼馴染の兄ということで、昔から知っている仲だったけれど、「先生」になるという共通の目標がふたりをつなげた、らしい。しんいち氏はすでに師範を卒業して教鞭をとっており、私たちが目標とするひとりでもあった。

「我が教室から、外の世界に飛び立つものが、再びあらわれるとは！」そう言ってかねこさんは、最初に恋人のできたまちこさんにつづいて二人目となったしゅうこさんを、笑顔で見つめていた。

しゅうこさんの話題で盛り上がっているところで、「ねえ、あおさんはどうなの？」急に話題がこちらに向いた。

「私……？」私はどうなのだろう。私は、恋をしたことなんてあったのだろうか。それに恋する相手は、異性でなければいけないのだろうか。だとすれば私には「彼」はいないし、この先できる予感さえしない。でも、恋とは、相手を尊敬し大切に思うことなのではないのだろうか。だとしたら私には、尊敬すべき大切な人がいる。尊敬と、それだけにとどまらない親愛なる気持ちをもつて接している相手が、いる。

ふと、あかりに目をやった。窓からの光を受けて、美しく彩られている。彼女はいつものように静かに本の頁をめくっていた。

「そうよね、あおさんにはまだ早いわね」かねこさんはそう言って笑った。

私もつられて、笑った。

教室ではじめて彼氏のできたまちこさん。彼女の将来の夫は出征して外地にいる。噂ではフ

イリピンの方の前線で戦っているらしい。

戦争はつづいているのだ。新聞記事を追いかけてながら、南方や支那^{しな}では、兵隊さんが死をかけて戦っていることを思い返す。まちこさんの恋人は、無事に帰ってこられるだろうか。

小さな幸せの意味を考えている私。

昭和十九年に入学した私たちは二年生になっていた。勉強できる環境を、両親に感謝しながら、師範を出て先生になる夢。私はこの夢にかけようと思っている。

それから、もうすこしだけ先の自分を想像して、勇気が湧いたり照れくさくなったりする。教壇に立ち、黒板に丁寧に板書する自分の後姿を、私自身が見つけている。そう、これは叶えなければならぬ夢であり、私のほんとうの幸せなのだ。

そして、あかりがいる。

彼女も先生をしている。同じ学校かは分からないけれど、やっぱり板書しているあかりの後姿を私は見つけている。

一緒にいられるように願いながら窓際のあかりに目をやると、ふいに視線がからまった。私は、あかりに惹かれて^ひいる自分を自覚する。

銃後の備えは、私たち女の重要な仕事だ。出征する兵隊さんと結婚したえいこは賞賛され

る。いつか、そういう順番が私たちにもまわってくるのだろうか。

もしそうなったら、私はどんな選択をするのだろうか。

あかりと離れることを受け入れられるだろうか。苦しい。胸と、それから胃の奥に何トンもの塊が流れ込んでくるような気がして、苦しい。

国民として戦争を受け入れ、生活のすべてを懸ける覚悟。

私は大きな流れのなかに、自分を溶かして、自ら語る言葉の大切さを失いかけていた。でも、あかりが教えてくれた。先生になる人間はそれではない、と。だから……、この戦争がどうなるかなんて分からないけれど、自分たちがもがける、そのやり方だけは見失わないように、図書室にも行くし、放課後の公園や河原であかりと話をしつづけたいと願った。

梅雨の明けた土曜日の午後、あかりの家の近くにある土崎つちざき神明社しんめいしゃへ一緒に参拝してから、あたりを散策した。土崎の港を遠くに眺めて、のんびり歩いていると、左手に見える秋田城址のあたりがかすんで見えた。私は日の光のかげんだと思った。この町の長い歴史が静かに呼吸をしている場所、それは私たちの郷土の誇りだ。

海の見える場所で休憩をした。食料は少なかったけれど、今日の散歩のために、余分にため

ておいたお芋で弁当箱をうめた。

あかりは、水筒の水をゆつくりと飲む。あたりはもう夏の色をしていた。夏休みの課題は面倒だったけれど、あかりと切磋琢磨しながら取り組む約束を交わしているので、楽しみでもあった。工場でのご奉公もあるけれど、勉強に励む気持ちは絶対に消えない。

あかりと指先が触れた。見つめ合い微笑む。二重瞼がやわらかい弧をえがく。丸い鼻の下には、きれいに横へのびた薄く赤い唇がある。ここ数年の苦勞のせいで、頬がこけているように見えた。でも、最近短く切ったばかりの黒髪にはまだ艶があった。

「私ね、このあいだ、芥川龍之介の『桃太郎』を読んだの」あかりが言う。

「うん。あかりに言われて私も読んだわ」

「すごい物語。私たちの価値観をするりと反転させてしまう、すごい物語」あかりの目が輝いている。

「私の弟たちが、学校のよびかけで、『桃太郎の海の神兵』というキネマを観たそうよ」

「うん。きつとすごい作品だと思うわ。新聞に書いてある限り……。でもね、いろいろ思うの、芥川の『桃太郎』を読むと」

「うん」私はうなづく。

「いったい、鬼とは誰なんだろう？ 中国では私たち日本人が鬼そのものなんだって」

「そうなの？」

「王世民^{おうせいみん}って人の本にはね、日本人を『東洋鬼』って呼んでるって書いてあるわ。かの国にとって日本は、攻めたててくるよそ者なのね」

「でも、私たちには正義があるはずでしょう」

「もちろんそうよ。でもそれは私たちの正義。世界普遍の正義なんて、とても難しいものと、私、思うの」

「うん……」

「芥川龍之介の物語の桃太郎や家来の動物たちは、鬼にとっては、理由もなく暴力を振りかざす者たちだったわ。鬼であるということが、暴力の対象になる理由として描かれていたわね。ねえ、あおさん。分かる？ どうして暴力を振るわれるのかって問う鬼に対して、鬼は鬼だからだという理由で攻めたてる桃太郎たちの、その危うい倫理が……」あかりの髪が風に揺れる。

「嫌な物語だわ……」私は言った。

正義というものをどの視点からとらえればいいのだろうか。そもそも、正義なんてものは本当に存在するのだろうか。そのことを棚上げしたまま、私たちはいまの時代を生きているのかも

しれない。

「ねえ、桃太郎さんのお話を書き換えてみない？」あかりが言う。

「どういうこと？」

「きつと戦争は終わる。そのとき、子どもたちにたくさん考えてもらうために、芥川のように物語を書き換えてみるのよ！」

「うん！ でも、面白そうだけど、私には難しいかも」

「そんなことない。あおさんは、身近なものをしっかり見つめる目をもっている。前に授業で発表した短歌は素敵だったわ」

「えええ、覚えているの？」

「松原のあさひきらめく沿道に夢追う若き……」

「いいから、よまなくても！」私の頬はきつと赤くなっていたに違いない。

「ねえ、考えましようよ！」

水筒の水、弁当箱のお芋を口にしながら、夏の、海から吹いてくるすこし生ぬるい風に身をゆだねた。

鬼とは誰なのだろう。本当に外側の何者かとして、追いやってしまわなければならない存在

なのだろうか。

「ねえ、桃太郎は何で鬼ヶ島^{おにがしま}へ行ったのかしら？」あかりが問う。

「村で悪事を働いた鬼退治のため？」

「芥川はその発想を逆転したわ。私たちは、鬼退治された後の世界を想像してみない？ 鬼はどこに連れていかれるのかしら」

「そうね、生き残った鬼たちは、どこかの収容施設に入れられるのかな」

「まるで受刑者みたいに。毎朝、囚人たちは、桃太郎の唱歌で起こされるっていうのはどう？」そう言くと、あかりは尋常小学校の唱歌を歌い出した。

♪桃太郎さん、桃太郎さん、お腰につけた黍団子^{きびだんご}、一つわたしに下さいな／やりましょう、やりましょう、これから鬼の征伐に、ついて行くならやりましょう♪……

囚人たちは、生まれながらにして収容所に入れられている。そのことへの問いを張り巡らし、怒りに耐えながら、収容施設での生活を送るしかない。いつか、訪れるかもしれない福音を信じて。

「そうしたらね、桃太郎が純粹で素直な好青年だったというのはどう？」私はつづけた。

「うん」

「村に住む同級生たちは、品行方正でなんの瑕疵^{かし}も見当たらない青年桃太郎を疎ましく思っていてね」

「うんうん」

「それで……」

「うん、それで？」

「それで、桃太郎に嘘をつくの」私は言った。

「どんな？」あかりが尋ねる。

「海の方こうの島に住む鬼たちが悪さをするから、退治しなければならぬ。この村も襲われて皆が犠牲になってしまう。先手必勝、鬼を退治してほしいって」私は想像力をせいっぱい働かせて話をつづけた。

「でも、その島に住むのは鬼ではなかったのね？」

「そう。純粹無垢^{むく}で百人力の桃太郎は家来とともに、何の罪もない島人たちを退治してしまっただけというのはどう？」今度は私が尋ねた。

「それで、生き残った人たちは、口封じに収容施設に入れられるのね？ つながったわ！」あかりはそう言って、私をぎゅっと抱きしめた。「面白いお話ができたわ。生徒たちに考えてほ

しいわね」

「うん」私は笑顔でうなずいたけれど、本当は怖かった。

本や雑誌を開くと、文字が黒い丸で消されているのは知っていた。言ってはならない言葉は、消されてしまう。だけど、姿かたち、すべてが消え去るのではない。足跡は残っている。●●●

●●●と消された奥に、現に言葉が存在していたことを知らされ、その●●●に該当するであろう言葉を、私たちは自分のなかから消し去らなければならない。

「海の神兵」でもある桃太郎は、正義の味方であり、御国を守る英雄なのだから悪事を働いたりするわけがない。その物語を改変して、生徒たちに伝え、一緒に考えることなど、果たしてできるのだろうか。

「ねえ、あおさん……不安そうな顔してる」あかりが私の頬に触れた。

「ううん、大丈夫」

「……ほんとのことを言うからね、あおさん……私はね、父を戦争で亡くして、つらかった。先日、かよさんのお兄さんが戦死したって話を聞いたでしょう。彼は英霊になったのかもしれない。家族も喜ばなければならぬ。だけど、私は、夜の小さな灯りの下で、戦死した彼を思っている家族の姿が目に見えぬ。私がそうだったから。亡くしたものは、どんなにきれいな言

葉で包んでも、二度と帰ってはこない……」

あかりはそう言ってから私の手をつよく握りしめ、強く抱きしめた。頬と頬が触れ合った。彼女の呼吸が耳元に届く。くすぐったくて、でも離れたくなくて、私も彼女を抱きしめた。

「本当は、怖いよ、あおさん」あかりが言う。

「私……頼りないかもしれないけれど、必ずあなたを守ってあげるから」私は言った。

「本当に？」

「本当よ」

「私をひとりにしないでね」

「当り前よ」

私たちは顔を見合わせてから、もういちど強く抱き合った。

あかりは私の大きな支え。私も彼女の支えになりたい。心を支え合うのが本当の恋人。だとしたら、私には大切な恋人が、いる。

私たちは創作の話をつづけた。

黍団子の正体について、家来たちから見た桃太郎について、おじいさんおばあさんの若返りについて……。物語は果てしなかった。小さな視点から、物語は無限に広がるようだった。

戦争が終わったとき、この物語たちが必ず意味をもつのだと信じて、私たちは語り合った。

あかりを大切だと思う気持ちをとめることはできない。

それはあかりも同じだと信じている。

昭和十九年は、戦争がどんどん迫ってくる年だった。でも私たちは勉強に勤しむことがまだできた。

年が明けて昭和二十年になると、空襲の惨禍は毎日のように報じられ、外地でも被害が広がっていることを知った。

——教える立場に立つものは、少国民の心のたづなを引き締めねばならない。そのためには国体をよく理解し、皇国悠久の大義の本質を教育する必要がある。御真影を敬い、遠く宮城におわす大君の赤子としてその日その日を御国に捧げる——。

校長先生のお言葉は、私たち生徒の心をひきしめる。この国に生まれた幸運を生徒に伝える役目は重大なものだと、確認させられる。

一方で、戦争を横目に、私の思いは膨らみつつける。

あかりが手紙をくれたのは一年生も終わるころ。思いにあふれたその封書を、私は机の引き

出しにしまっている。便箋には「大切」という言葉が連なっている。支え合い、もっと立派に成長していきたいと書かれている。

はじめて頬と頬が触れたのは、旭川のひとりだった。顔を見合わせて、照れ隠しに笑いあった。同時に、もういちど、触れたいと思い、あかりを抱きしめた。

大切な記憶が私のなかにたまっていく。

図書館で話をして、いろいろな本を教えてもらってから、私の将来への思いは具体的なものになっている。ただの先生から、「こんな」先生になるために、私は努力ができるようになった、と思う。

弟たちの勉強を見てあげる。国語の教科書を読みながら、想像力が膨らむようなたくさんのお話がしたくなる。でもまずは、文字の読み書きと、しっかりした解釈の道筋を知ってもらう。

「あおが先生になったら嬉しい」と笑顔で言う弟のかずきの言葉に、涙が出そうになる。

戦争が終われば、苦労は報われ、皆が幸せになれる。

将来の兵隊さんを産み育てよ、という風潮がおさまれば、私とあかりのような者たちだって幸せになれる日が来ると信じたい。

だから、いまを耐えることにも躍起になれる。

あかりの実家は、秋田城址に近い、土崎港付近の蓮華寺のそばにあった。秋田駅にほど近い私の家からはすこし離れている。それでも、放課後や休日はふたりで過ごすことが増えていた。同じ目標を掲げ、ときには競い合うことで、私たちの心はいつも共振していたのだと思う。

夢で終わらぬよう、私たちはしっかりと歩みつづけていく。そう何度も誓い合った。

幼馴染の友だちの兄弟や、しばらく会っていない親戚たちが次々に出征していく。

私の父は、教員の仕事をしているときに、腰に大きな怪我を負ったこともあり、幸いなことに戦争とはあまり縁がなかった。腰の怪我のため小さな弟たちの面倒を見るのは大変そうだったが、勉強を教える技術はさすがに長けていた。弟も妹も、私が教えるときよりおとなしく机に向かう。

戦死の報告を受けるご近所が増えていた。

苛烈な前線で、御国のために命をささげた人々は、英霊となって国家を鎮守するのだ。

息子を亡くした近所の母親に、そう告げねばならないのは教師を勤める父の役割だった。町内会はそうやって支え合わねばならない。言葉を幾重にも包み重ね、そのいちばん奥にあるは

ずの核心から遠ざける術^{すべ}。苦しい、と父は言った。死を、死として受け入れ、語ることができないことは、苦しみでしかなかった。

ひずみはもう隠しきれなかった。

夜、電気の消えた近所から、泣き叫ぶ声が聞こえてくる。しばらくして闇にひろがる静寂が声を吸収してしまったかと思うと、再び慟^{げう}哭^きが響きはじめる。

目を閉じるしかない。瞳が痛くなるほど瞼を閉じながら、私は悲しみの意味を考える。

同じように悲しんでいる人が、きつとたくさんいる。戦う相手の国にも。悲しみは連鎖するのだろうか。とどまることのないつらい思いは、いったいどこに行きつくのだろうか。

国語の教科書も、修身も教えてくれない。国民の道徳はより良き日本人像を築き上げるために必要だと理解はするけれど、そこから人々の声を聞きとることは、私にはできない。

私が聞かねばならない哀哭の声は、大きなものに塗りつぶされて、やがて消えてしまうか、あるいはなかったものになってしまうのかもしれない。

国防が目的の婦人会に属しながら、突きつけられた近親者の死をもって、感情が張り裂けていくように思う。でも、きつと人目のある昼間は、その裂け目を隠して過ごさねばならない。銃後の思いは、こうやって見えない場所にしまわれてしまうのだ。

いつたいつまで戦争はつづくのだろう。戦争が当たり前の日々になっていく私たちにとって、この問いは、不思議と棚上げされたままだったし、問いかけ自体が憚られることを、ずっと受け入れてしまっているのだと思う。

私は、弟たちが戦争にとられるのを恐れた。非国民という誹りを受けようとも、思いは変わらないと蒲団のなかでは思うけれど、出征兵士を見送る人たちの群れに身を置いたとき、果たして、私の思いは正当なものとして機能するだろうか。私には分からなかった。

それでも、あかりとの彩りのある日々が私の将来をあかるく照らしてくれた。

一年生のときの出会い。あれから思いを語り合い、私たちの間には、ふたりにしか理解しない友愛の在り方がうまれた。重ねた手の暖かさ、触れ合う頬のやわらかさ、震える唇は渴いているけれど、たくさんの感情が露出する場所でもあった。

先生になった後のことをたくさん話した。物事を、正面からだけ決めつけないために、どんな教材を作れるか。「桃太郎」だけではない。「浦島太郎」の竜宮城は何を意味しているのか考えるのも楽しかった。

ある日、「桃太郎」の収容施設に入れられた鬼たちが、一揆^{いっき}を起こす物語をあかりが話して

くれた。抑圧する力に抗して、収容施設内で一揆が起こる。急造の棍棒こんぼうや竹槍たけやりを武器に、鉄砲を手にした管理者たちと争う鬼の眼には、とめどない涙があふれていた。収容所の外で呼応する鬼たちは少なく、ついに一揆は失敗に終わってしまう。桃太郎の王国は、暗い霧のなかでいつまでもつづいていくのだろう。

あかりは悲しそうな表情を浮かべてから、小さく笑った。「かなわない者たちは、永遠にその場所から逃れられないのかな」

私はあかりを見つめた。どこかに行ってしまうような彼女を、結い留めておくために。彼女の不安は知っている。父の戦死した家庭にあって、たったひとりの兄も戦地に赴いている。南方の激戦地、死を賭した兄の意志を尊重するなら、生きて帰れないことも受け入れなければならぬ。だけど、あかりの感情がそれを許さない。祖父母の援助があったとはいえ、女手ひとつで育ててくれた母のことを考えると……、戦争は悲しみを際限なく膨らませてしまう残酷な機械に思えるのだ。

「戦争が終わったら、きっと……」私の言葉は途切れた。

「……あおさん。戦争が終わったら、ね」

「うん、戦争が終わったら、みんな、幸せになれるわ」

「信じて戦いましょう。戦場にいる兄の思いを無駄にはできない」あかりが言う。

「私たちも、絶対に大丈夫だからね……」私は言った。

「うん。あおさんがいれば、強く生きていける。ありがとう」

あかりが私の胸に顔を寄せた。不安が爆発してしまいそうだった表情がすこし緩んだように見えた。私はあかりの側にいて、あかりも私を支えてくれている。

彼女を感じ、こうして一緒にいられるとき、私に怖いものはない。

いつまでも、一緒にいられることを信じて、私たちは歩んでいきたかった。

夏の晴れ間がつづいていた。

夏休みは兵器工場などへ、順々に奉公へ行かなければならない。学校の予定も、戦争により毎年、変更されていく。

成績考査のための試験が終わっても、私は勉強に励んでいた。しゅうこさんの成績には追いつけないけれど、せめて胸元ほどには到達してみせる。そんな意気込みを抱きつつ、夏休みを過ごした。

八月の金曜日、工場での奉公の合間に、学校であかりに会うことができた。その週末にはゆ

つくり話ができると思っていだけれど、お盆にさしかかることもあり、家庭の用事があるから会えない、とあかりは言った。うちでも盆の準備を、例年に比べて質素ながらもはじめていたのを忘れていた。彼女と一緒にいる時間をすこしでも増やしたかったけれど、残念、そんなことを話しながら、自習を終え、いつものように「またね」と言って別れた。

それが、私たちの日常のすべてだった。

彼女の笑顔の意味なんてとりたてて考えもしないし、握手したときの手の暖かみはいつもと変わらない。手をふる姿を目に焼き付けようなんて思いもしなかった、それはいつもと変わらない帰り道での、いつものお別れだったのだから。

だけど、そんな日常のすべては、抗^{あらが}えない大きな力によって断絶されてしまった。

八月十四日火曜日、いつもと変わらない灯火管制のしかれた暗い夜。

その日、早めに寝ていた私は、九時ごろにいちど目を覚ましたけれど、またすぐに眠りに落ちた。

遠くの方から聞いたこともない大きな音がやってきた。

空襲警報が聞こえなかったので、その音が焼夷弾によるものだとは思いませんでした。父が

「空襲だ！」と叫んでいる。そんなわけないよ、と思いながら、でもこの音が空襲でなければ何なのだろうと思ってもいた。

蒲団から飛び出し、家族のもとへ走った。妹は震えながら泣いていた。弟は、家のなかを駆け回り、「きちくべいえい！」と叫びながら、こぶしを振り上げている。モンペ姿で必要な手荷物をまとめている母の側に行き、大きな風呂敷を受け取った。父が、「塩！」と怒鳴る。命をつなぐために必要な塩を、家族それぞれがポケットに押し込んだ。

家を出るべきか迷っている、いままでいちばん大きな轟音ごうおんが響いてきた。

音はまだ遠かった。でもその迫力、熱風のようなものを身体が敏感に感じ取っていて、それが恐怖を膨らませていく。

遠くの方に炎の山脈が広がるのが見えた。

私は、戦争のなかにいた。戦争を見ていた。外に走り出そうとする弟の手をつかむ。いま離れてしまったら二度と会えない。

父の指示に従い、いちど居間に集結した。繰り返される無数の爆音に、気が遠くなる。恐怖のためにか、ふと気を失った母が倒れるのが分かった。身体を支えるために駆け寄ったとき、また大きな音が響いた。

あの轟音が響いてくるのが、炎が連なり燃え上っているのが、土崎の方だったことに気がついた。私は外に駆け出したかった。あかりの家まで、飛んでいきたかった。玄関先に父が立ちふさがる。外を眺めながら、荒くなった呼吸を鎮めようとしているのが分かる。

私は二階へと駆け上がった。窓をあけて物干し場へ出ると、そこはいつもの場所なのに、いつもとはぜんぜん違う、赤い景色に包まれていた。

近所の人たちが大騒ぎしている。大声が聞こえてくるけれど、何を言っているのかは分からない。逃げろ、とか、留まれ、と言っているようにも聞こえる。大変なことが起きている。その大変さを、しっかり理解することができず、私は、ただあかりを思い、手を伸ばして、ここにはいないはずの彼女を必死に掴もうとした。あつ、と思ったときには、私の身体はもう、夜のなかに落ちていた。

——どれほど時間が経過したのか分からない。叫び声があたりを覆っていた。爆音がどんどん近づいている気がした。同時に身体の節々に痛みがはしった。とくに右足が痛かった。額から血が流れているのも分かった。庭の、見慣れたはずの風景がぐるぐると回っている。

弟が私の胸の上で泣いている。「よかったよかった、生きてた生きてた」。間抜けな私は、二階の物干し場から落下した。でも、私は、生きていた。やっと我に返り、目線を横に向ける

と、さつき氣を失った母が泣きながら笑っていた。父が私の頬をさする。爆音が響く。空襲が近づいてくるのが分かる。でも、私の家族は、みんな生きている。私は痛みをこらえて立ち上がった。皆で身を寄せかたまり、ゆっくり家屋へと移動した。

偶然なのだろうか。そこに居合わせた偶然、そこに生まれた偶然、この時代に生まれた偶然。だけど、それだけのことで、こんなにたくさんさんの痛みと向き合わなければならぬのだろうか。

私は、悔しくて泣いた。同時に、家族が生きていることへの嬉しさが感情をぐちゃぐちゃにかき混ぜていく。私はどんな表情をしているのだろうか。恐怖に震える弟と妹にはもう力は残っていないかった。父は熱風の吹く玄関先に立ち、家族の命の責任を背負う。母は家の外を眺めながら、無表情だった。

私は、身を起こして外に目をやった。

土崎の空が燃えているのが分かった。炎にあおられている空は地獄のように思えた。

そうだ！ あかりだ！ 私はあかりを助けたくて二階へ駆け上がったんだ！ あかり、無事でいて、あかり、生きていて、あかり！

きつとあかりは無事だ、と自分に何度も言い聞かせながら。

燃え上がる炎は幾重にも重なり、土崎の方角は徐々に視界に入らなくなる。だけど、必ずあ

かりは、あかりの家族は生きている。絶対に無事に生きている。生きていて！ 生きていれば、必ず笑顔になれる。

私は祈った。祈りつづけた。

夜の空を赤黒く焼きつづける炎を見つめながら、それでもあかりの無事を、ずっと祈っていた。

「B 29 秋田市を襲ふ 百卅機で投弾二千發」（『秋田魁新報』一九四五・八・十五）

世紀の前夜秋田市民はまこと世紀の体験をこの身になしこの魂に感じた……

出来事は語られる。

でも、ここに記された記事のなかに、人はひとりもない。推定された二百数十人という死者数の報告にも、顔は、ひとつもない。

そこにあかりはいない。あかりの生きた記憶も、記録も、彼女のやさしい笑顔も、生徒を思

って創作した物語の断片も、一生懸命勉強するその姿勢も、教室でのふるまいも、授業中の様子も、私と一緒にいるときに見せたたくさんの表情も、手のひらの暖かさも、柔らかいからだも、乾いた唇も、ときおりみせる苦しみも、私をいつも肯定してくれるやさしさも、一緒に見つめた将来も、そして何より、私と一緒にいるはずだった無限の時間も……。

何も語られてはいない。

運よく運ばれた病院で怪我の治療を受けることができた。私の家族は、市内への空襲からも被害を受けることは無かった。

あかりがああ空襲で死んでしまったということは、お見舞いに来てくれた師範の同級生が教えてくれた。

その報告を聞いたとき、これからどうやって生きればいいのか、私は自分を見失った。

あの空襲の次の日、戦争は終わった。たった一日、戦争が長びいたために、戦争が終わらなかったために、あかりは死んだ。たくさんの人たちが苦しみながら亡くなっていった。

空襲のあけた、八月のあの日、空の底まで真っ青に晴れたあの日、戦争は終わった。戦争は、本当に、終わった。

私の足の状態はあまりよくなく、入院はしばらくつづいた。

私は、ベッドの上で、何度も何度も手を伸ばしてみた。そこにあかりがいると信じながら。でも、あかりに触れることは、もう、できなかった。

奪われたものの大きさ。私のなかの深い空白。それでも生きているという現実。それらを重ね合わせてみて、私は、自分が呼吸している意味を見つけられない日々を送るしかなかった。

日々は無意味に過ぎて行つた。季節が過ぎても、私は空白そのものだった。

……だけ。

だけと……。

あかりは言うのかもしれない。あおさん、先生になれつて。生徒にたくさんのことを教えてあげろつて。自分で考えて生きていける生徒を育てろつて。そして二度とこんな戦争を繰り返さないためのしつかりとした土台を生徒たちの心のなかに作れつて。

私は祈つた。あかりのことを強く思いながら。

もし、私に、これから先を生きる意味があるのなら、それはあかりが届ける未来への言葉がつむいでくれる。その言葉は、あかりの心の奥の宝石。美しい彩りのあの宝石なのかもしれない。

だから私はあなたとなら、生きていけるかもしれない。だからお願い、あかり。私のなかか

ら決して消えてしまわないで。戦争は終わった。戦争はもう終わったのだから。

小説の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

秋田への道程の先に

北原 岳

秋田を訪ねたことは何度かあった。毎回秋田の素晴らしい文化を再認させられた。なまはげ、秋田犬、竿燈、美術館に城郭、それから美味^{おい}しい食事とお酒。秋田への興味は尽きない。

今回、四年ぶりの秋田行きには新幹線を利用した。景色は飛行機から見たものとは違った。県内に入ると風景がぐっと近づいた。空から見た時とは全然違う自然。木々の太さ、紅葉の幾重もの色彩のグラデーション。川の激しい流れと周囲の岩々のコラボレーション。息をのんだ。自然が生きていた。美しさと激しさの奥、秋田の文化の根源にじっと存在する「何か」が確かに呼吸していると思った。やはり秋田への関心を持ちながら創作をつづけてよかった。



そんな思いを胸に表彰式の場に立った。華やかな光の渦の中で涙が出るほどの興奮を覚えた。選考委員の選評を聞いて自分の力の足りなさを実感しつつ、それでもこの秋田という土地、文化に関わることができ、「ふるさと秋田文学賞」を受けられたことに感謝の思いが膨らんだ。

作品には素直な思いをぶつけた。仕事から戦争と文学に関心があった。秋田の戦争を調べて知ったのが昭和二十年八月十四日夜の土崎の空襲。歴史に「if」はないけれど、もし戦争が少しでも早く終わっていたら。「土崎みなと歴史伝承館」を訪ねたとき、戦争で犠牲になった方々の声が聞こえた気がした。その思いが今回、小説というかたちになり、一定の評価をいただけたことが本当に嬉しい。自然の美しさ、文化の豊かさ、美味しいお酒。秋田愛深まる。

最後に最終選考委員の方々、一次選考委員の先生、本賞に関わる全ての皆様、そして書くことを支えてくれる家族に感謝の思いを伝えさせていただきたい。ありがとうございます。

第11回 ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

星をあつめて

矢部

郁・作

星を
あつ
めて

「花火にはな、お星さまがたくさん詰まってるんだ」

「お星さま？」「そうだ、よく見てろよ」

一筋の光が夜空を昇っていく。大輪の花が咲いて、遅れてバンと音が鳴る。パラパラと赤や青、色とりどりの星が瞬き、降り注ぐ。

「どうだ、父ちゃんの花火は？　すげえべ」

子供のように無邪気に笑い自慢する、幼き日に見た父の顔を白神華しろかみはなは思い出していた。

一

阿木健太はじつとりとした嫌な湿気で目を覚めました。

このごろの天気予報は梅雨入りの話で持ち切りだ。傘を持っていくかいかないか以外は、生活が特段何か変わるわけでもない。しかし、カーテンの隙間から見える重たい雲のせい、身体を起こすのでさえも阿木にはひどく億劫おっくうに感じられた。

のろのろと洗面所に歩き、顔を洗う。手で水気を拭いながら顔を上げ、鏡に映った自分を眺める。ところどころ皮膚は垂れ、目が落ちくぼんだような気がした。

「老けたな……」阿木は鏡に向かってぼそつと言う。

いつの間にか厄年も越え、当たり前かという気持ちと老いてゆく寂しさや焦燥が胸の中をぐるぐると巡った。

昔から記者や物を書く仕事に憧れていた。しかしジャーナリズムなんて大仰な言葉は自分には似合わない気がした。大学を卒業すると阿木は新聞社ではなく出版社に入社し、男性向けファッション雑誌を担当した。最新ファッションはもちろん、芸能、音楽、恋愛などなんでも書いた。会社で出世していくうちに、いつの間にかやら阿木はハイソぶって文化人を気取り、自分が流行の最先端を歩く時代の寵児ちようじのように感じられた。六本木、青山あたりを肩で風を切って歩き、横文字のブランドをありがたがった。

しかし、人間墮おちるのはあつという間で、突然事件は起きた。阿木は日本ファッション界のご意見番と呼ぶべき人物の機嫌を損ね、激怒させたのだった。もちろん社内でも大問題になった。謝罪して、お白州に座らされた町人よろしく、ははあと頭を垂れば今のようにはなっていないかったのかもしれない。しかし、阿木は正しいことを言ったとばかりに、上司に啖呵たんかを切って会社を辞めた。

フリーになって、誰にも負けない最高の記事を書いて全てを見返してやる。そう意気込んでいたが、会社の看板を外した阿木に出来る仕事は何もなかった。阿木は結局のところ、誰かが

作った流行や、誰かが良いといったものを会社の看板を使って書き連ねていただけだった。会社をやめてすぐ、会食だ飲み会だとうるに家に帰ってなかった阿木はあっさりと妻に出ていかれた。

そこからは貯金を食いつぶし、胡散臭い都市伝説やら下世話なゴシップ記事を書いてなんとか食いつないだ。自分が時代の寵児でも、何者でもなかったことに気づいてもなお、東京という街で腐りながらも、書くことにしがみついている。その理由は、それすら失うこと、阿木にとってそれは、これまでの人生の否定であり、自殺と同義に思えたからだ。

二

高校卒業と同時に東京を飛び出し、父の故郷である秋田県大仙市だいせんに向かうのは華にとっては当然のことだった。

「お父さんがあんなことになったのに……。なんで花火なんて……。私は絶対許さないから」
華の母、紗代は娘から顔を背け、ただ泣いていた。それもまた紗代にとっては当然のことだった。

「お母さんがなんて言おうが私行くから」

華はそう言くと、なかば家出同然に新幹線に飛び乗った。

華の父、陽介は花火師の家に生まれ、家業を継いで花火師になった。勉強はてんでダメ、家のことだって紗代がいなければ何もできない。しかし、花火作りに関しては一流の職人だった。頭のなかには花火のことについて、子供みたいで、全然父親らしくない。それでも華はそんな父が好きだった。

華が六歳の頃に陽介は祖父に代わって白神煙火の社長となり、全国花火競技大会、通称、大曲^{まがり}の花火で内閣総理大臣賞を受賞した。子供の頃の華には、その賞の重みは分からなかったが、自分の父が日本一になったのだと誇らしかった。

それから、陽介の仕事はますます忙しくなった。休みなく花火作りに打ち込み、そんな疲労からか、最悪の日は突然訪れた。陽介が一人で作業場に籠っていたとき、爆発事故が起きた。原因はおそらく静電気による引火だそうだ。

陽介はあっけなく死亡し、会社は全損。そして、白神煙火は倒産し、白神家の家業は幕を閉じた。

ほどなくして華は紗代に連れられ、秋田を去り、東京で暮らすようになった。

三

散らかった机の上にある「ムー大陸は存在した!」とでかでかと書かれた雑誌を掴み、一瞥すると阿木はそれをゴミ箱にねじ込んだ。

「くだらねえ」と吐き捨てるが、そんな記事を書いたのは自分自身に他ならなかった。そんな現実にはますます嫌気がさす。

昼過ぎだというのに阿木は外出もせず、寝巻のまま。目をこすり、あくびをするとスマートフォンが震えた。

「おう、久しぶりだな」

「朝田、なんだよ?」と眠そうな声で阿木は返事をした。

電話をかけてきた朝田は小さな出版社に勤めている。会社員時代からの付き合いで、会社を辞めてからもたまに小さな仕事を回してくれる。ただ、阿木が気乗りするような仕事の話は一度もなかった。

「お前、取材もライティングもいけたよな?」

「ああ。それでなに?」阿木はだるそうに答える。

「秋田行ってくれない?」「はあ? なんで?」

「大曲の花火の記事書いて欲しいんだ。もう夏だろ？ ウェブで夏を振り返る特集記事出してくてさ。人手足りてないんだよ。頼むよ」

「秋田まで行って花火って……。なんで俺がそんなこと」

「いや、お前さ。仕事選べる立場かよ。取材に必要なカメラとか機材送るから。しばらく向こうに滞在して、いい感じの記事にしてくれ。とにかく頼むな」

「おい、そんな勝手な……」阿木は舌打ちをしながら続けた。

「新幹線の切符も送ってくれ。立て替える金がねえから」

「はあ……。分かった。じゃあ頼むな」

「あと宿……」阿木がそう言いかけるとすでに電話は切れていた。

「おいおい……宿どうすんだよ」

阿木はスーツケースに衣服を詰めこんでいる。格好つけて着ていたブランド物は会社を辞めたあとに残らず処分した。スーツケースを埋めるのはほとんどファストファッションばかりである。

届いた機材とノートパソコン、スーツケースを持って、阿木は東京駅に向かった。

「華、どうだ花火は？ うまぐいつてつか？」

「うーん、まだ手伝いばっかだし、分かんない」

祖父に訊かれ、流しに食器を下げながら華はそう答えた。祖父は居間で新聞を開き、茶を啜すすっている。

「やっぱあいつの娘だな。カエルの子はカエルか。女だてらに花火師やんのも簡単じゃねえべ。でもやるって決めだんなら頑張れ」

「うん、私はやるよ」

「いいが、華。花火師は一瞬の油断が命取りだ。分がん？ くれぐれも気いつげろ」

「うん、分かったよ。そろそろ行ってくるね。じいちゃん」

玄関の引き戸を開け外に出ると華は自転車にまたがる。職場の澤田花火工業までは自転車で十五分ほどだ。

社長の澤田は陽介の友人、いやライバルというのであろうか、とにかくそういう仲であった。東京を飛び出した華が真っ先に澤田を訪ねると、「陽介んとこの華ちゃんか。大きくなっただな」と姪かわいでも可愛がるかのように喜んだ。しかし、華が花火師になりたいからここで働かせ

て欲しいと頼み込むと途端に渋い顔になった。

「重てえもんも運ぶし、大変な世界だ。やめとけ」そう言つて止められた。

「お父さんの仕事見てましたから、知つてます。それでもやりたいんです」

「それに……事故だつてないわけじゃねえ」

澤田や、もちろん祖父も、そして母も、華が花火師になるのを止めるのが他でもない華のためだということは華自身も分かつていた。それでも、花火師になりたい、花火を作りたいというどうしようもない衝動を華は止められなかった。華は何度も何度も澤田に頼み込んだ。

「そうか、血は争えねな。特別扱いはいしねえぞ」と、澤田はついに根負けしたのだった。

そこから華は与えられた仕事はなんでもやった。打上筒運びや筒場の設置の手伝い、玉貼り、一生懸命だった。とにかく花火に関われることが嬉しかった。

夏の緑の中を華の自転車が駆け抜けていく。雨は降らないらしい。

ブレーキを軽く握り、スピードを緩めながら華は澤田花火工業の敷地へと入っていった。工業という名前には似合わず、澤田の自宅に併設された小さな工場であり、社名は木札に筆で書かれている。

アルミサッシの扉を開け、畳敷きの作業場に入るとすでに澤田が座っていた。

「おはようございます」

「おう、おはよう。そうだ、お前に話あんだ」

華が澤田の顔をじっと見ると澤田が口を開いた。

「ここさ来て一年くらいになるべ。どうだ？ 今度の大曲、お前の作った花火も上げてみつか？」

華は目を丸くし、そしてみるみる口角が上がっていく。

「はい！」華は満面の笑みを浮かべて返事した。

「おう、がんばれや。それにしても笑った顔があいつにそっくりだな」

父と同じ舞台で花火を打ち上げられることが華はたまらなく嬉しかった。

五

東京駅から三時間ほどで新幹線は大曲駅に到着した。機材が入ったバッグを肩にかけ、スーツケースを引いて阿木はホームに降り立った。高い建物は見えず、やけに空が広い。東京駅に比べるとこじんまりした駅で改札はすいぶん少なかった。駅舎を出ると「大曲の花火」と書かれた大きな花火玉のモニュメントに出迎えられる。

秋田とはいえ、もう七月であり、やはり夏は暑かった。天気は快晴で夏の日差しがまぶしい。阿木はポケットからスマートフォンを取り出すと朝田に電話した。

「おい、出ねえじゃねえかよ」阿木はため息をつく。どんな記事がいいのかを聞いても、朝田は花火のいい感じの記事を頼むと言うばかりで詳細はよく分からなかった。

「おいおい、ふざけんよ」とぼやきながら阿木は昼食をとる場所を探していた。せっかく秋田に来たのだからと名物を検索する。そして、阿木は「稲庭うどん」に目を留めた。丁度、大曲駅の近くにも稲庭うどんの店が見つかった。これからどうしたらいいやら、阿木にはまったく分からなかったが、とりあえず空腹を満たしに行くことにした。

店へ向かう途中、朝田から着信が入る。

「おい、着いたぞ。大曲」

「おお、そっか。よかった。お疲れ」

「お疲れじゃねえよ。どこ行って何取材したらいいんだよ」

「任せるよ。お前のセンスでなんかい記事にしてくれ。まあ、とりあえず花火師とか取材したらいいんじゃない？」

「はあ、なんだそれ。どうなつても知らねえぞ」

「大丈夫大丈夫」

「おい、あと宿……」阿木がそう言うついでに電話は切れていた。

六

うどん屋を出た阿木は「花火伝統文化継承資料館」を訪れた。「はなび・アム」という名前がついているらしく、おあつらえ向きの施設だと思った。花火の歴史や製造工程の資料、花火玉の実寸大の模型などが展示されていた。また、花火工場をディスプレイでバーチャル見学することも出来た。

まだどんな記事にするか、まったく先は見えていないが、とりあえず一通り撮影する。一回りすると、エントランスに戻り、自動販売機で飲み物を買おうとベンチに腰をおろした。

「やっぱり実際に花火工場に行って取材したほうがいいだろうな……」

阿木はそう呟き、スマートフォンで近くの工場を調べる。どうやら雄物川おものがわの向こうに何軒か集まっているようだ。

「どうする……」

阿木は途方に暮れていた。何軒か工場を回って見たものの、多忙な時期のようであつてなく取材は断られた。まもなく夕刻になろうかという時間で、夏の日は長いとはいえ、そろそろ宿を確保しなければと不安になってきた。頼みの綱の朝田には連絡がつかない。県道沿いをとぼとぼと歩いてみたものの、水田や野山の他はどこどころに、倉庫が建っているくらいでびつくりするほど何もない。コンビニが見えただけでひどく安心した。駅前の方に戻ろうと思つても、たまに乗用車やトラックが無情に通り過ぎていくばかりでタクシーは一台も見えない。阿木はタクシーくらい通るだろうと東京の基準で考えていたことをひどく後悔した。

鳴らないスマートフォンを握りしめ、ひたすら県道を歩く。すると、若い女が自転車の前でしゃがみこんでいるのが見えた。まだ十代だろうか、化粧つけはあまりなく、毛先が顎にギリギリかかるくらいで、髪は短い。大きく丸い目をしきりにパチパチさせ、うんうん唸りながら、なにやらカチャカチャと手を動かしている。自転車の故障だろうか。

「どうした？ 大丈夫？」

そう声を出した瞬間、阿木はハツとした。もしか、自分是不審者に思われるのではないだろうか。おそらく東京だったら阿木は声をかけなかった。しかし、目の前の困っていそうな女が

同じく途方に暮れる同志に思えて、気づけば自然に言葉が出ていた。

「チェーンが切れちゃったみたいで……」

若い女が振り返って阿木を見るが特におびえた様子もなかった。阿木は少しほっとして自転車に目をやった。

「これくらいなら直せるかも、ちょっと見せて」と阿木は安請け合いをした。

「え、ほんと！」と女が期待した顔をしたので、これはなんとかせねばと阿木は気合いを入れ、しゃがみこんだ。

「おじさん、どこから来たの？」「東京からだよ」

「そうなんだ。私も前は東京にいたんだよ」

「へえ、親の転勤かなんか？」

「ううん、やりたいことがあって出てきた」

「珍しいな、普通逆に東京に行くもんじゃないか」

阿木は一生懸命指先を動かしながら言った。しかし、切れたチェーンがなかなかはずれず、ひたすら力む。

「東京になんでもあると思ったら大間違いだよ。ねえ、おじさん大丈夫？」

「大丈夫大丈夫」と阿木は軽く言うが、時折ふんつときばる様が言葉と合っていない。滑稽に見える。

「おじさん、別に無理しなくていいよ。そんなに遠くないから押していけばいいし」

「いや、大丈夫だ」額に汗を流しながら阿木は言い張る。手でははずれない。そばにあった石でコンコンと叩いてやつとはずれた。まだ作業の半分だが阿木は「よし」と大げさに言う。続いて、コマをはめ込む作業に移るがこれまた難航した。「クソ！ この！」などと気合いを入れながらチェーンと格闘する阿木を横目に女は所在なさげにしている。

「よし、出来た」阿木がそう言う頃にはすっかり日が落ちていた。

「あ、ありがとう。手と服結構汚れちゃったね」

女が苦笑いしているのを見て阿木は気恥ずかしくなった。

「おじさん、こんなとこで何してたの？」

「ああ、取材に来ただけで、断られてしまって。駅の方に戻ろうにもタクシーが通らなくて困ってたんだ」

「こんなところタクシー通るわけじゃないじゃん。東京じゃないんだから。取材って、おじさん記者か何か？ なんの取材？」

「そんなようなもんだ。花火だよ。花火工場を取材したくてな」

「え、すごい偶然じゃん。私、花火師だよ。取材に協力してあげよっか？ 社長にも頼んでみるよ。おじさん、頑張ってくれたし」

「おい、本当か？ それは助かるが……いいの？」

阿木は小躍りしたい気分だった。若い女性の花火師、記事としてもインパクトがあるだろう。

「いいよ、明日社長に頼んでみるね。それで、おじさんどこに泊まるの？ 近くに宿ないと思うけど」

「決まってるないんだ……。まあ駅の方に行けばなんかあるだろう」

「行き当たりばったりだなあ。いいよ、うちに泊まりなよ」

「いや、さすがに女の子の家にお世話になるわけにはいかないよ」

「大丈夫だよ。じいちゃんもいるし。じいちゃんも昔花火師だったんだから。丁度いいですよ。職場も近いし」

阿木は朝田の連絡を待ちながらうんうん悩み、結局甘えることにした。

「本当にありがとう。じゃあ……お世話になる。本当にいいのか？」

「うん、いいよ。行こ。私は白神華。おじさんは？」

「阿木だ。阿木健太」

「よろしくね。結局、自転車押すことになっちゃったね。なんか、おじさんって子供みたいだね。意地っ張りで」

「そんなことないだろ。それに名前言ったのにおじさん呼びかよ」

「おじさんって呼び方慣れちゃったんだもん」

そう言うとき華は無邪気に笑った。華は自転車をカラカラと押しながら、阿木はスーツケースを引きながら、二人は夕日の中を歩き出した。

七

「ほれ、け。遠慮しねで」「へ、毛ですか？」

阿木が訝^{いぶか}しんでいると、「食べなつてこと」と華がすかさず口をはさむ。

阿木はこの状況に困惑していた。祖父と孫、そして見ず知らずの自分で食卓を囲んでいる。華が阿木を泊めると言うとき、華の祖父は二つ返事で了承した。警戒心というものがないのだからか……。田舎ならではなのだろうか、と阿木は考えていた。

「いただきます」そう言って手を合わせると、丁度こんな感じで田舎に泊まるテレビ番組があったなと思うながら、阿木は遠慮がちに箸をつける。食卓には華が作った料理が並んだ。煮物と味噌汁、白いご飯。いふりがつことじゅんさいの酢の物がついているのが実に秋田らしい。

「うまいよ」「そう？　よかった」

食事を終わると華はそそくさと風呂に行ってしまった。華の祖父と二人きりになってしまい、阿木がたいそう気まずい思いをしていると、祖父が口を開いた。

「あんた、花火の取材に来たんだった？」

「ええ、そうなんです。よかったらお話聞かせてください」

「引退したじつこに話せることなんかなんもね」

華の祖父は目を細め、笑いながらそう言った。

「どれ、酒っこでも飲むべ」

華の祖父は一升瓶とグラスを二つ取り出した。阿木は酒っこが酒のことであることを理解した。

「華さん、女の子で花火師って珍しいですよね。おじいさんの影響ですかね？」阿木が世間話のつもりで切り出す。

「父親の影響だべな。いい花火師だった」

「だった？」阿木はグラスに口をつけ訊き返す。

「死んだ。花火の事故でな」

「それは……」阿木はまずい話題だったと後悔した。

「それでも華が花火師なりでえつつうのは、やっぱ父親に似たんだべな」

「もしもし」

「おい、朝田。全然連絡つかねえじゃねえかよ」

「すまんすまん、忙しくてな。お前いまだこだ？」

「白神さんちだよ」

「白神山地？」「ああ」

「なんでそんな遠くいるんだよ。花火関係ないだろ」

「いや、近いし、関係大ありだよ」

「え？」「え？」

阿木は華の紹介で澤田花火工業を訪れていた。

「お忙しいところすみません。本日からしばらくお世話になります。阿木と申します」
注意された通り、放電板に触れ、静電気を除去して中に入る。

「おう、東京から来たんだってな。あんまりお構いできねえけど見てってくれや」

作業着姿の澤田はいかにも職人といった面構えで髭ひげを蓄えている。

澤田は花火作りの工程をざっくりと説明してくれた。資料館で見たことの復習という感じで阿木には丁度よかった。

華は「星掛け」という作業をしているそうだ。時折、撮影しながら、邪魔にならないように慎重に近づく。

「これは星掛けっていつてね。芯に火薬を溶かした水、トロって言うんだけど、これをかけて混ぜる。そしたら火薬をかけて、天日で乾かす。そうやって少しずつこの丸い玉を大きくしていくんだ」

華は斜めに取り付けられた釜が回転する機械で作業をしていた。その顔は真剣そのもので昨日のあどけなさはどこかに消えていた。

「この星には金属が混ざってそれが花火の色を出すの」

「なるほど、炎色反応だな」阿木は何が何色かなんて覚えていなかったが、理科でやった知識を少し思い出した。

「花火にはこの星がいっぱい詰まってるんだ。天気の良い日にしか干せないから時間がかかるの」

「どのくらいかかるんだ？」阿木は訊いた。

「だいたい二十日くらい」「そんなに……？」

「うん、花火って手作業ばかりだからね。作るのにすごい時間がかかるんだ。花火大会一回分の準備で半年とかかかるよ」

「あんなに一瞬で終わってしまうのに、なんだかもったいない気がするな」

「花火師はその一瞬の美しさのために魂込めるんだよ。それこそ命がけで」

阿木は昨夜、華の祖父から聞いた話を思い出していた。しかし、触れてはいけない気がして特に何も言わなかった。

「桜だったり、花火だったり、日本人は儂いものはかな好きだよね」

「そうかもしれないな」

もしかしたら人の一生もそうなのだろうか。華の父のことを頭に浮かべながら阿木はそう思った。目の前で懸命に作業に取り組む華を見ると、それは命を燃やしているようで美しかった。

そして、日々を浪費しているばかりの自分がひどく醜く見えた。

九

丁度、華が昼休憩をしようかと思っていたときだった。

「華、ちょっといいか」澤田が華を呼び止めた。

「大曲で上げるお前の花火だがな、二発の尺玉しゃくだまのうちの一発。自由玉の方やってみろ」

「私ですか？」

華は大役に驚いていた。大曲の花火、つまり全国花火競技大会では、二発の十号玉、通称、尺玉と花火の創造性や独自性が求められる、創造花火の部門がある。大会で最も大きい花火である尺玉は、高度三百メートルまで上がって、半径百四十メートルの花を咲かせる。文字通り、花形である。まさか、その片方を自分が作るとは夢にも思わなかった。

「あいつと同じ舞台だ。別に叩いだなんて言わねえ。ただお前の最高の花火を見せてやれ」

「はい、頑張ります」と華が返事をする、澤田は軽く手をあげ、振り向かずに作業場を出て行った。澤田が去るとすぐに華はどんな花火にするかじっと考えた。どんな花火を陽介に見せたいだろうか。

「おじさん、スイカ食べる？ お隣さんからもらったの」

風呂上がり阿木に華が声をかける。阿木は髪をタオルで拭きながら「スイカなんて久しぶりだな。いただくよ」と返事をした。

阿木が縁側に腰掛ける。暑さはだいぶ和らいでいるが、夏の夜の少しぬるい空気が肌を撫でる。華の祖父はもう寢床についたようだった。

「はい。おいしそうでしょ」

華もスイカを置くと、縁側に腰掛けた。

「ありがとう。それにしても、すごいじゃないか。君が作った花火も打ち上げるんだろ？」

「ちょっとプレッシャーだよ」華はそう言って笑った。

「でも、がんばるよ。社長がくれたチャンスだもん」

「その……お父さん……。事故、だったんだってな。悪い、おじいさんに聞いたんだ」

阿木は慎重に言葉を探しながら、そう切り出した。

「ああ、いいよ。そんなに気を遣わなくて。私はお父さんが死んだこと、どこか納得してるんだ」

阿木は一口かじったスイカを置き、華の顔を見つめた。

「お父さんね、花火馬鹿なの」

「花火馬鹿？」

「そう、頭の中は花火のことばかり。他はなんも出来ないの。でも本当にお父さんの作る花火は綺麗きれいだね。私は大好きだった。いつも小言ばかりのお母さんもお父さんの花火見るときは笑顔だった。そりゃあ、お父さんが花火作ってなかったらこんなことにはなっていないし、長生きして欲しかったよ。でもさ、花火師やらないで長生きする人生がお父さんにとって幸せだったとは思えないんだ。Q なんとかってやつ？」

「QOLだな」と阿木が答えた。

「そうそう、それ。本当、花火みたいな人なんだよ。だからお父さんは幸せだったと思うんだ。本当、しょうがない人だよね」

華はそう言って阿木に笑いかけた。

「そんなに夢中になれることがあるなんてすごい人じゃないか」

「おじさん、慰めてくれてるの？」

「いや、そんなじゃないよ。本当にそう思うんだ。だから、お父さんも君もすごいよ」

「そっか、ありがとう。絶対、天国のお父さんがびつくりするような花火上げてやるんだ。おじさんはないの？ 夢中になれること」

「あつただけだな。どっかに失くししまった。もう俺も歳だし、湿^し気^げた花火みたいなもんだよ。もう火が付くことなんてない」

阿木はそう言いながら遠くの空を眺めていた。

「俺の話はいいんだよ。取材に来てるんだから」

「別にいいじゃん。それにね、湿気た花火も天日干しして乾燥させたらまた綺麗に咲くんだよ」

「そういうもんなのか」

「そういうもんだよ」

華がそう言う頃には、二人ともスイカを綺麗にたいらげ、皿の上には皮だけが乗っていた。

「スイカうまかったよ。ありがとう」

「うん、おいしかったね。お皿流しに置いていて」

「いや、洗っとくよ。そんならいさせてくれ」

「そう？　ありがとう。明日も早いし、寝るね。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

十

「なるほどな。花火師の女の子ね」

「ああ、そうだ。記事の方向性は見えてきた」

この日、阿木は東京に戻り、朝田の出版社を訪れていた。

「じゃあ『美人過ぎる花火師』とかどうよ？　一時期流行り^{はや}だったし、結構引きあるんじゃない？」

「いや、それは絶対ダメだ。華さんも他の花火師さんも真剣に花火作ってんだ。女の子がどうかとは関係ない。低俗な記事で汚したくない」

会議室のテーブルの向こうに座る朝田は少し驚いたような顔をして、やがてにやっと笑った。

「ふうん、お前、なんか秋田で変わった？」

「いや、別にそんなことねえよ」

「そうか。まあいいや。最初からお前に任せるって言ってたしな。お前が書きたいように書いてくれ」

久々に我が家に帰り、殺風景な部屋を見渡すと阿木はため息をついた。ポストに溜^たまった郵便物をテーブルに無造作に置き、軽く仕分けるとパソコンを開く。撮った写真を取り込み整理した。

八月に入り、東京はうだるような暑さで、阿木は堪らず冷房を強にした。華は暑いなか、今日も作業に没頭しているのだろうか。そんなことを考えた。画面上の矢印をクリックしていくと取り込んだ写真が流れていく。そこに写る華や澤田の顔は生き生きとした熱氣に溢^{あふ}れていた。これから自分もこんな顔つきになることがあるのだろうか。パソコンの電源を落とし、真っ黒になった画面に突如映る中年の顔を見て阿木は情けなくなった。

「やっぱ老けたな」そう呟いた。

久しぶりに独りで夕食を食べる。食べ飽きたコンビニ弁当の残りをかきこんだ。すると、電

話が鳴る。

「あ、もしもし。おじさん？」

「ああ、どうした？」

「無事に東京着いた？」

「ああ、着いたよ。なんだそんなことか」

「そんなことじゃないでしょ。じいちゃんも飲む相手がいないって寂しがつてるよ。またすぐ戻ってくるんでしょ？ 遠慮しないで泊まってね」

「いや、さすがに悪いよ」

「じいちゃんもおじさんが気遣って帰ったんじゃないかって心配してたんだから。二人には広すぎる家だし」

「いや、でもなあ……」

「じゃあ、わかった。お土産買ってきて。あれがいい。東京ばな奈！」

十一

「こんにちは。阿木です。またお世話になります」

「おう、あんたか」

「これ、お土産です。皆さんでどうぞ」

「おう、わりいな。ありがとう」

だんだんと大曲の花火の日が近づく。澤田花火工業の準備も佳境を迎え、皆忙しそうに仕事している。華も額の汗を拭いながら作業をしていた。

今やっているのは、玉込めという作業だそう。半球の玉皮たまかわの中心に割薬わりやくという花火を炸裂させ、星を飛ばす火薬を詰める。そして、その周りに芯星しんぼしを詰める。そして、また外側に割薬、そして芯星と何層かに重ねる。一番外側の星を親星おやぼしと呼び、内側に芯星が何層あるかによって、三重芯みえしん、四重芯よえしんなどと呼び名が変わるそう。

そしたら、同じように詰めたもう一つの玉皮と貼り合わせ、球体にする。その後、玉貼りと呼ばれる、クラフトテープを均等な厚さになるように何重にも貼る。これが、花火玉の圧力を高め、花火を大きく開かせる。その後、転がしてテープの隙間の空気を抜くゴロと呼ばれる作業を経て、天日で乾燥させたら完成だそう。

「お、帰って来だな。飯食ったら、酒っこ飲むべ」

華の祖父はくしゃつと笑って阿木を迎え入れる。

「はい、またお世話になります。あとこれお土産です。よかったらどうぞ」

「わざわざすまねな」

「おかえり、おじさん」

「おう、ただいま……」と阿木は気恥ずかしそうに返事をした。

夕食のあと、酒を酌み交わすと、華の言つてたことは嘘ではなかったようで、華の祖父は嬉しそだった。東京でのことなど他愛もない話をしばらくすると、「寝っぺ」と言つて華の祖父は寢室へと向かった。

華は風呂から上がるなり、扇風機の前に陣取つてぼけつとした顔で涼んでいる。花火を作っているときの表情とまるで違う、子供みtainな様子に阿木は少し笑いそうになった。

「そういうば、大曲の花火。お母さんは見に来るのか？ 東京にいるんだつたよな」

「ううん、来ないよ。お母さんはね、花火がお父さんを奪つたつて思つてる。納得してないんだよ。お父さんが死んでからお母さんは一回も花火見に行つてない」

そう話す華の顔は死んだ父のことを話すときよりもどこか寂しそだった。

「そうか」とだけ阿木が返す。

十二

お盆も過ぎ、いよいよ大曲の花火まであと数日となった。

華は完成した自分の尺玉をしばらく眺めていた。どんな花火になるかというわくわくとうまくいくのだろうかという緊張が交互にやってくる。尺玉には玉名のシールが貼られている。その横に大きく名前を書いた。

〈星をあつめて 白神華〉

阿木はなぜか東京に戻った。所用があるらしい。当日また来ると言っていたが、取材はもう充分なのだろうかと華は少し心配した。しかし、書く本人が言うのだから大丈夫なのだろうと準備に集中することにした。

「ちゃんと完成したな」

いつのまにか澤田が立っていた。

「はい、なんとか」

「まあ心配すんな。お前に任して、お前が丹精込めて一生懸命作ったんだ。どんな花火になろうと俺は文句ねえ」

華が不安そうに見えたのか、澤田が声をかける。

「あいつは東京戻ったみたいだな。まったく、こっちは忙しいのによ。どうせなら手伝わせりやよかったな」

「きつと、阿木さんも仕事かなんかあるんですよ」

「そういうや、一席分のチケット無いかって聞いてきたな。嫁さんでも連れてくるのかね」

十三

いよいよ、全国花火競技大会、大曲の花火当日となった。朝から澤田花火工業の従業員総出で準備に取り掛かる。全国二十八の花火業者が集まるだけあって、炎天下のなか、多くの花火師達^{たち}が黙々と筒場の設置をしていた。華も作業着姿で頭にタオルを巻き、仕掛けの準備や打上筒への玉入れ、配線をしていく。そして、尺玉用の大きな打上筒に自分の作った花火玉を入れる。尺玉は約八キロあり、ずっしりと重いが衝撃を与えたり、こすったりしないように慎重に筒へと入れていく。

大曲の花火は二部制で、昼花火が十七時十分から、夜花火が十八時五十分から始まる。時間はまだまだあるが華は緊張していた。なんとなく阿木と話せば落ち着くような気がして、昼の弁当を食べながら電話をかけるがつながらなかった。

まもなく昼花火の打上時間となり、打上前の最終点検をした。そして打上方法は遠隔電気式のため、筒場から離れる。ヘルメットをかぶり、社名が大きく書かれた揃いの法被はっぴに袖を通してた。

華はチラチラとスマートフォンを見るが阿木からの連絡はなかった。何かあったのかと心配にはなるが打上前のため、邪念を振り払うかのようにスマートフォンをポケットに押し込む。しばらくして、開始のアナウンスが響き渡り、開会宣言がされた。

まだ明るい空を赤や緑、極彩色の煙が染めていく。しばらくして澤田花火工業の番となり、無事に五発の五号玉が打ち上がった。

夜花火のオープニング花火が上がったところ、阿木から会場についたとメールが来た。華は「遅い！」とだけ返した。

夜花火は各企業ごとに、芯入り割物と呼ばれる伝統的な花火と自由玉の二発の十号玉、創造花火の順で上げられる。

開会宣言がされたあと、標準審査玉と呼ばれる得点基準となる花火が打ち上がった。澤田花火工業の順番は二十八号、トリである。

一号の企業から百人一首の読み手のような独特の抑揚で社名が呼ばれ、花火を打ち上げてい

く。澤田花火工業の順番まで一時間以上あるが、二号、三号と順番が近づくに連れて華の緊張は増していった。

華のスマートフォンが振動した。阿木からのメールで、「がんばれ」とだけ書いてあった。華は「他人事だと思つて」と呟き微笑んだ。

しばらくして、二十七号の花火が終わった。澤田花火工業の名前が呼ばれる。点火のスイッチを押せば自動的に花火は打ち上がる。ここまで来たらあとは祈ることしか出来ない。

「ちゃんと見ててね。お父さん」華が心の中で呟く。父の顔を思い出すと不思議と緊張は消えていた。凪いだ水面のように心がすつと落ち着いている。

空はすっかり闇に覆われていた。法被が風にふわりとたなびく。

澤田の合図で点火スイッチが押された。まず、澤田が作った「昇曲付四重芯変化菊」が打ち上がった。

そして、華の「星をあつめて」が打ち上がる。一筋の光が空に線を描く。そして、赤、青の菊が咲くと、中から無数の黄色い星が一気に飛び出す。ドンと音が鳴り、空気が震える。ほろくき星のように尾を引き、瞬きながら、夜空に軌跡を残して星が降り注いだ。そして、色を変え、点滅しながら闇にすうっと消えていく。煙と静寂だけが残った。それはまるで小さな銀河

であつた。

いざ打ち上げてみれば、一瞬の出来事であつた。華が自分の玉が無事に開いてよかつたとホツとする間もなく、創造花火が始まる。

阿木はちゃんと見ていたのだろうか。そして、父に、陽介に届いたのだろうか。音楽と共に滝のように流れる仕掛け花火、そして連続で打ち上がるスターマインを見つめながら、そんな想いが華の頭をよぎつた。

音楽が止み、澤田花火工業の創造花火が終わると、一瞬の静まり、歓声と喝采が聞こえた。終わつた安心感なのか達成感なのか華には分からなかつたが涙が出て、頬が熱くなつた。

全国花火競技大会、大曲の花火が終わつた。今年は内閣総理大臣賞は出なかつた。澤田花火工業は、創造花火の部、十号玉芯入り割物の部で共に準優勝を受賞した。華の作つた自由玉は入賞出来なかつた。悔しさと父と同じ舞台に立てたという嬉しさが華の胸の内で混ざりあつていた。

こうして華の夏が、初舞台が終わつたのだつた。

十四

華は阿木からのメールを開いていた。堅苦しいビジネス文章で記事や写真の確認依頼が書かれている。どうやら無事に記事は完成したらしい。華は自分のことが書かれた文章や写真を見ていると少し照れくさくなった。

メールを読み進めていると、もう一通メールが届いた。タイトルには「余計なお世話かもしれないが」とだけ書いてある。開くとそこには一枚の写真が添付されていた。

「なにやってんだか。普通、花火をメインで撮るでしょ」

そう言って華は思わず笑う。そこに写っているのは、華の花火とそれを見つめる母、紗代の横顔だった。笑っている紗代の隣で陽介も笑っているような気がした。

「もしもし」

「おお、どうした」

「どうしたじゃないよ。確認終わったよ。なんか恥ずかしい気もするけど、素敵な記事を書いてくれてありがとう」

「いや、こっちこそ本当に世話になった。ありがとう」

「で、なにこの写真？ まったくなにやっつてんだか」

「おじいさんから連絡先とか聞いてな……。すまん、勝手に」

「いいよ。おじいさん、……ありがとう。そして、自分では気づいてないかもしれないけどおじいさんは馬鹿だよ」

「おいおい、馬鹿ってなんだよ」

「んー。なんだろう？ 取材馬鹿？ 物書き馬鹿？ そんなところ」

十五

暦の上では夏も終わりだというのに、まだ蟬の声が騒がしかった。今年の残暑も厳しいだろうなと少し憂鬱になりながら、阿木は自宅のベランダで溜まった洗濯物を干している。日差しがジリジリと容赦なく阿木に照りつける。

「すぐ乾くのはいいけど俺まで干からびそうだな」

阿木はそうぼやきながら空を見上げ笑った。また咲けるだろうか。

小説の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

はじめての秋田とラッキーパンチ

矢部 郁

このたびは佳作をいただきありがとうございます。選考委員の先生方や秋田県の職員の方々やスタッフの方、関係者の皆様へこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

私は福島県出身で大学からはずっと都内で暮らしております。秋田へは子供のころに行ったことがあったような……、といった具合で、同じ東北人ではございますが、あまりゆかりがありませんでした。表彰式はじめての秋田と言っても過言ではないと思います。

こまちにしばらく揺られ秋田県に入り、車窓からの景色を



眺めますと、山々がすでに色づきはじめていて、とても美しかったです。途中、大曲駅に停車すると、ここが自分が書いた小説の舞台か、となんとも不思議な気持ちになりました。秋田駅のホームに降り立ち、肌に感じる空気は東京よりも冷たく、冬により近い場所へ来たのだなと思いました。秋田駅は思ったよりも大きく、お洒落^{しゃれ}さとのどかさが混ざりあったようで素敵^{すてき}でした。少しでも秋田の良さを実感できた気がして、素直にまた来たいと思いました。いつか本物の大曲の花火も見に行こうと思います。

私は今年の四月から小説を書きはじめ、たまたまインターネットで見かけた「ふるさと秋田文学賞」へ応募しました。佳作をいただけたのもたまたまの結果であり、ラッキーパンチだと考えております。しかし、来年は狙いすまして一番をいただけるよう、先生方のお言葉を胸に精進いたします。

第11回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞

男^お鹿^がっ子ナマハゲ論

笹

リン・作

男鹿っ子ナマハゲ論

色あせたカラー写真があの日を物語っている。動画のような臨場感と共に愛しさにも浸ることが出来る私のお気に入り一枚だ。年代ははっきりしないが日付けは間違いなく十二月三十一日だ。

男鹿市民ならその日が何を意味するのかピンとくるはず。そう、ナマハゲがやってくる日である。私は昭和三十六年男鹿市船川港ふながわみなとで生まれ、高校卒業までそこで過ごした。他県での暮らしはもう四十年を超える。祖父母と両親、姉弟の七人家族の暮らしが恋しく浮かぶ年齢となった。

写真に写っているのは祖母と母、私の三人で、窓を開け放った縁側で暗くなった外を向いて立っている。おそらく小学校高学年であろう私は、思いつき握りしめた右手を口元に当て両目をつぶり怯えた顔おびで写真に収まっている。なのに、祖母と母は満面の笑顔でとても楽しそうだ。笑い声も聞こえてきそうなくらいだ。三人ともカメラ視線ではないから、きっと絶妙なシャッターチャンスだったのだろう。

二人は誰かの言葉に反応しているようだ。会話の内容は何なのか、何があってそんなに楽しそうなのだろうか。切り取られた瞬間に想像が広がる。怯えている私を大人たちがからかい、愉快なだけのようににも見える。

カメラマンは父に違いない。当時、黒い皮のケースに収まったゴツゴツしたカメラが客間に掛けてあったのを思い出す。それは父の数少ない趣味の一つでもあった。祖父母と父は亡くなっており、施設にいる母に写真の記憶をたずねることはかなわない。ならばと、懐かしいあの頃を書き綴^{つづ}ってみたくなった。

私が小学生だった昭和四十年代、近所のどの家も子供は三、四人いて、皆大晦^{おおみそか}日を恐れていた。十二月に入り楽しかったクリスマスが終わると、その日に向けてのカウントダウンが始まる。早く終わってほしいような、こないでほしいような、複雑な思いで数日を過ごすことになる。他の地域に生まれたかったと何度思ったことか。どれほど恐れおののいていたのか、五十年以上経った今でも記憶に残る出来事がある。

小学生の頃ナマハゲ恐さに、一つ下の弟と結託し家出をたくらんだ。恐い鬼たちから逃れた一心だった。二つ上の姉は何故か仲間にいなかった。日中にお菓子を買い込んで、ジャンパーのポケットにしまい準備をした。子供心にも生き延びるために食べ物が必要なことだけは感じていたようだ。家を出るタイミングは、夕飯が終わる父がナマハゲの準備に出掛けた直後とした。年取りの夕飯はいつもより早く食べ終える。弟に目配せをし、作戦通りに裏口からそつと出た。

寒く暗い冬の町中をどれくらいウロウロしたのかは覚えていない。人気のない倉庫の裏側に隠れてみたりもした。今思うと、ほんの二、三十分ほどの家出にも値しない時間だったのかも知れない。結局寒さと暗闇に負けて、ナマハゲが出発する前にあっけなく降参となった。祖母や母に叱られた記憶はなく、家にはすんなりと入ることができたようだ。

ナマハゲはその年に不幸があつた家には入らない。母は可哀想に思つたのか、私と弟をそんな状況下であるお向かいさんに退避させてくれた。鬼たちから逃れられてホッとしたが、家出騒動はこれで幕引きではなかつた。

家々の訪問を終え集会所に戻るナマハゲ軍団に母は密告したのだ。「今なら、家に戻っている」と。不意打ちをくらい逃げ惑つたが、おもてなしのお酒がいい感じに回っている鬼たちはいつも以上に張り切っていた。「泣ぐ子はいねがあー」「悪い子はいねがあー」の声もより一層迫力を増していた。母は最初からナマハゲ様に私たちを懲らしめてもらう算段だったのだ。良くない行いにはやはり罰があるのだ。文句も出なかつた。今は、そんな結末で良かったと思う。

二匹の鬼が帰り際に残していく決まり文句がある。「親のいうごとを聞がねどきは、三つ手をただげばいつでも山からおりでくると」。母が私たちの前で手をたたこうとするときは必

死になって阻止したものだ。それほどに、信じて疑わない絶対的な存在であった。

お面をかぶり「ケデ」という藁^{わら}の衣装をまとい、木で出来た包丁を振り回しているのは父や近所のおじさんたちだと分かっている。それでも、目の前にいるのは間違はなく鬼の化身だった。家の中を逃げまわりながらも、横目に見える大人たちは玄関や窓を叩いて恐怖心をあおる演出にとっても楽しそうだった。町内会の映像記録が残っていないのがとても残念だ。地域の人達の使命を帯びた、誇らしげな表情をもう一度見てみたい。そして、父たちの伝統行事への思いを聞いておけばよかったと今更ながら悔やまれる。大晦日の家族団らんも早々に出掛けていくほど大切な役割だったのだから。

ユネスコ無形文化遺産に「男鹿のナマハゲ」が指定されて六年になる。登録確定の瞬間を、男鹿市役所から生中継で伝えていた。喜びにあふれる男鹿の人たちを画面越しに見て、私も本当に嬉しかった。やはり、誇りうることなのだと実感する。祖母と母は秋田県民ではあるが男鹿の生まれではない。だが、日々の暮らしの中で大晦日が大切なものになっていたのは間違いない。写真の笑顔から十分に伝わってくる。

家出までした弟が後に担い手となり、自身の子供をいましめる側にまわったときは、さぞ楽しかったに違いない。弟の子供たちもやはり大晦日を恐れていて、その日は朝から緊張感いっ

ばいの表情で可哀^{かわい}そうなくらいだった。男鹿に生まれた子供たちはいつの時代も一緒だという風景に嬉しくもあった。

そうやって大事に守ってきた伝統行事も昨今、私の子供時代とは大分様変わりしたようだ。先日あるテレビ番組でナマハゲの現状を取り上げていた。ひたすら人に優しくなっているのだという。令和の鬼たちは、最後に残していく言葉かけも家人の安否を気づかう、ぬくもりあふれるものに変わっていた。コロナ禍のディスタンスとやらで、締め切った玄関の外に立たされる声も出せず、手を上げ下げする動作しか許されていない姿に私は悲しくなった。そんな扱いをされるなんて。時代の流れや社会情勢の変化という言葉で割り切ることが出来なかった。

だがそう口にする私も、実は居心地の悪い対面を自ら招いてしまったことがある。二〇二二年秋、秋田県主催のイベントが東京・渋谷の高層ビル内で催された。パンフレットに記載された「男鹿のナマハゲ練り歩き」の文字にワクワクし会場へは二度足を運んだ。声を出せないのは仕方ない、コロナ禍の都内だし屋内だし。寂しように無言で会場に佇^{たなず}んでいる鬼に私の方から声をかけてみた。

扮していたのは船越^{ふなこし}出身の方だった。そのことにホッとする。やはり男鹿の人でなくてはならない、半歩譲っても秋田県民であってほしい。自身も男鹿の出であることを告げるとお面を

少し浮かせ、世間話に応じてくれた。懐かしく嬉しい反面、男鹿の子供たちにとっては特別な存在であるナマハゲに馴れ馴れしい態度をとることに、バツの悪さも同時に感じていた。たとえイベントであっても軽々しい行為に後味が悪かった。

コロナも落ち着いた二〇二四年三月、友人に誘われて東京・銀座にある秋田料理の店に出掛けた。ナマハゲが客席を回るショーがあるという。近づいてくる雄たけびはあの頃と同じ迫力だった。またまた出身地を聞かずにはいられない性^{さが}。お面の下は由利本莊市出身の方だった。前回の反省を生かし接触はそこでとどめた。でも、自身が男鹿の出であることをアピールするのはもちろん忘れない。結局私は、本家本元の体験者であることを自慢したくてしょうがないのだ。

今回久しぶりに家出事件を回想することになり、一人残された姉はどうしていたのかふと気になり聞いてみた。長女は孤軍奮闘し、じっと押し入れに隠れていたらしい。ふすまをほんの少し開け隙間からのぞくと、祖母が指をさして居場所を教えているのが見えたようだ。万事休す。もう逃げられない。

そうやって子供はいつも親たちに裏切られているのに、恨んだり文句をぶつけたことは一度もなかった。何故なのか、その答えはただ一つ。男鹿の子供たちにとってナマハゲは年に一度

やってくる神様そのものだったのだから。六十歳を超えた今でも当時のままにあがめる存在として私の中に生き続けている。渋谷で感じた居心地の悪さはこれに尽きる。

神様を迎える伝統行事を繋いでいくことは、大人たちにとって無上の喜びであったはずだ。子供たちは恐怖心と戦ったあとの解放感に包まれながら、対峙しきった清々しさを味わう。そうやって迎え入れる新年の壮快感は今も覚えている。十二月三十一日に行われる意義を改めて思う。

恐かった鬼たちは遠い昔となり、実家がある地域でも少子高齢化の波で行われなくなって久しい。そんな現状に肩を落としていた私だが、ナマハゲ追想を書き始めた五月下旬嬉しい引き合わせがあった。

男鹿市立男鹿南中学校（前身の船川中学校は私の母校）の生徒たちが描いた、各集落に伝わるお面の絵を集合させた大きな観光ポスターを最寄り駅で見掛けた。タイムリーな巡り合わせに気持ちが高ぶり、しばらく見入った。描いている生徒たちの真剣なまなざしが浮かんでくるほどに生き生きとした絵の数々だ。馴染みの面はすぐ見つけられた。彼らに心強さをもらえた。遠くの街で来訪神のそろう踏みに会えたよ！ 男鹿っ子みんな、ありがとう。

イベントへの登場や、時代に馴染んだ姿でもよい、何よりも受け継がれ息づいていることが

大切なかもしれない。

おっかねくて仕方ねがった父さんたちのナマハゲは時代のひとコマとして、大事に胸にしまっておこう。それでいい。恋しい物語へはあの一枚が引っ張っていつてくれるのだから。

姉と弟に今度、私の想いを読んでもらおう。写っていない二人はあの時、どこで何をしていたのだろうか。面白い話が聞けるかもしれない。おべでる（おぼえている）といいなあ……。

エッセイ・紀行文の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

郷愁

笹
リ
ン

昨年、初めて「ふるさと秋田文学賞」に応募し最終選考に残ることが出来、著名な先生方に自身の作品を読んで頂けたことはこの上ない喜びでした。また、内館牧子先生には選評で個別にご指摘を頂き感謝の念に堪えません。今回、二度目の応募で大賞に選ばれたことは大変嬉しく、光栄な思いで一杯です。そして、盛大な授賞式の場に立てたことは、いま思い返しても夢のような時間でした。

私がこの文学賞を知ったのは、都内のアンテナショップに置かれていた第十回の募集要項でした。紙面に大きく使われていた写真が男鹿・鵜ノ崎海岸の夕景であるとすぐ気付きました。



した。子供の頃に、なべっこ遠足や磯遊びによく出かけた場所です。秋田県主催の文学賞でもあり、郷愁に誘われ迷わず応募を決めました。

応募作二点共、生まれ故郷である男鹿での暮らしを綴りました。「書く」ことが、育てられた地域への恩返しになれたら嬉しいという思いがあったからです。この度の受賞により、男鹿の皆さんが読んでくださったなら、こんな嬉しいことはありません。前作は四季折々の豊かな食をテーマに書きました。遠い記憶をたどり、故郷で過ごした風景を思い浮かべる時間は幸せなひと時でもありました。

授賞式が終わり会場を出ようとしたとき、二人の女性がお祝いの言葉をかけてくれました。お礼の言葉を返すと、「書いてくれてありがとうございます」という思いもかけない言葉を頂き、驚きと同時に胸が熱くなりました。男鹿の方だったのでしょうか。もう少しお話しすればよかったと悔やまれます。

故郷というものはいつも温かく、そして優しく迎え入れてくれる存在なのだと、今改めて感じています。これからも折に触れて、大好きな秋田への想いを書いていきたいと思っています。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださった関係者の皆様、誠にありがとうございました。

第11回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

学 校

鹿 住 敏 子・作

学
校

夜の学校

あれは、小学校二年生の夏休みだっただろうか？ 父の自転車の後ろに乗せてもらい、当直当番の学校へついて行った。当時の小学校の夜間の警備は、現在のような警備会社ではなく、当直当番の男の先生が担っていた。幼い頃からお父さん子だった私が、自分からついて行きたいと頼んだのか、父の方から声をかけてもらったのかは覚えていない。夕方、家を出るときに、母は、夕食のおにぎりとおかずを持たせてくれた。まだ、舗装もされていないデコボコ道。大きな父の背中にしがみついて、お尻ごとピョンピョンと飛び跳ねてしまう私の姿は、弾んでいるようにも見えたかもしれない。

小学校までは四キロちよつと。私が通う小学校の山道の方角とは違い、父の勤務先は、駅に近い町の方だ。村で一番のにぎやかな通りで、さまざまなお店もある。小学校へ曲がる最後の角に、稲葉商店というお店があった。アツ子ちゃんと呼ばれているお姉さんが店番をしていた。

「お父さんと一緒にいいね」なんて、笑顔で話しかけてくれた。お菓子の種類も豊富だ。父はそこで、煙草たばこを買っていたのかもしれない。初めて目にするようなお菓子をいくつか買ってもらい、学校まで、あと少しの道のりを、また、父の自転車にまたがる。日暮れまでは、まだ間

のある夏休みの校庭は、大勢の子どもたちでにぎわっていた。宿直室に荷物を置いて、職員室で日直の先生と引継ぎをする父について行く。

日が暮れて、子どもたちが帰った後の校内を回る。校庭だけではなく校内も開放していたので、廊下も教室も雑然としている。開けっ放しの窓を閉めて鍵をかける。床に落ちている白いシャツや靴下などの衣類を拾い、名前を確かめてその子の机の上に置く。バラバラになっている椅子を机の下に入れて、きちんと整列する。それだけで、教室は見違えるほどきれいになる。それを、すべての教室で繰り返す。誰が見ているわけでもない。それでも、父は、それらを丁寧にやっていた。私だけが、それを見ていた。親の背中から学ばせてもらうのはこんな事だったのかもしれない。まだ、電気を点けるほどでもない明るさの中、校内全部の見回りが終わると、宿直室に戻る。

宿直室の隣には、簡単な炊事場がある。母が持たせてくれた夕食の他に、父が汁物など何品かを作ってくれた。家では、台所に立つ父の姿は見たことがなく、大きな手で料理する父の指先は、とても器用だった。父の性格なのだろう、丁寧に作られた父の料理は優しい味がした。テレビは部屋になかったのか、あっても点けなかったのか、見た記憶がない。夕食の片づけを済ませた後は、床の間に置いてあった囲碁のセットで五目並べをした。碁盤は、厚みのある木

の立派なもので、碁石は大きく、並べるときには「パチン　パチン」といい音が響いた。五目並べをマスターすると、父が囲碁を教えてくれた。数回で覚えられるほど簡単ではないけれど、奥が深くてすっかり夢中になった。

夏の日もとつぷりと暮れた八時頃。最後の校内の見回りに行く。

懐中電灯を持った父と二人、昼の賑わいが嘘うそのような、真つ暗でシーンとした廊下や教室を見回る。夕方の見回りで閉めたはずの廊下の窓がところどころ開いている。忘れ物でもとりに戻ったのか、きれいに整頓したはずの教室の机や椅子も乱れている。それを、当たり前のように丁寧に戻す。

夜の学校は、怪談話にも出てくるけれど、父と二人で回る学校はちっとも怖くなかった。普段は見られない学校の様子に、ワクワクしながら回った。一時間近くかけて見回りを済ませると、今日の仕事は終わりだ。宿直室に並べて敷いた布団に入り、眠りにつく。

息子为学校

学校は、私にとって、とても身近で懐かしい場所だが、息子との思い出だけは違う。

大宮市のSデパート。四月に、新一年生となる息子にランドセルを買ってくれるために、秋

田から、父と母が上京してきてくれた。売り場に整然と並んだピカピカのランドセル。息子と一緒に選ぶ。本来ならば、息子にとつても、それを見守る祖父母にとつても、人生の中でも最も成長の喜びを感じる瞬間なのだろう。その選ぶ基準がちょっとだけ違う。「軽くて自分で背負えるもの」「六年間使えるように」という選択肢は頭がない。

四歳になったばかりのときに、小児がんの一つである脳腫瘍を発症した。幼い体で受けた手術と化学療法の後遺症を、命と引き換えに背負うことになった。身体的には顔面を含む右半身の麻痺。術後間もなくからのリハビリで、右足を引きずりながらも歩行はできる。

外からはうかがい知ることのできない、知的な後遺症は、これからどんなふうに進んでいくのか、この時点では想像すらつかなかった。そんな私たちの複雑な思いとは関係なく、息子は真新しいランドセルを背負って嬉しそうだ。

入学する前年の十一月頃に、市の教育委員会から連絡がくる。息子に適した学校を選択するための話し合いが何度も行われた。生まれ持ったの障害ではなく、二年前に突然背負った障害。まだ、親としての心の準備や覚悟がまったくできていなかった。

教育委員との面談は、市内の肢体不自由児が通う養護学校（現特別支援学校）で行われた。教育委員会としては、この養護学校が適しているのではないかという意見だった。養護学校を

初めて見学した私にとっては、戸惑いが隠せなかった。障害を持つお子さんに偏見を持っているつもりはなかった。けれども、椅子に座ることが難しい数人の子どもたちが、鉄筋の床に直に座って活動をしている姿に、衝撃を受けてしまった。個別の丁寧な指導内容だったのかもしれないが、それは、まったく頭に入ってこなかった。床暖房でもない鉄筋の床の上で過ごすのは、冷たくて寒いのではないだろうか？ 厳しい治療を終えたばかりの息子が通うのは、身体的にも厳しいのではないのか？ 何度勧められても、そこへ入学させたいとは思わなかった。

小児医療センターに併設された病児の養護学校が、一番ふさわしいと思ったが、そこは、入院しての通学しか認められない。ひとたびハンディキャップを持ってしまうと、小学校への入学一つにしても、こんなにも大変になってしまうことを改めて思い知った。

迷った挙句に決めたのは、発病前まで一緒に遊んでいた幼なじみたちが通う地元の小学校への入学だ。もちろん、事前の校長先生との話し合いで、さまざまな条件が付く。親が送迎をして、息子が登校している時間は、校内の指定された部屋で待機していること。

教室に入ると、子どもたちは「ゆうきくん」と言って迎えてくれる。けれども、二学期に入るころには、成長著しい子どもたちとの差は大きくなる一方だ。勉強の内容も徐々に難しくなる。対して、息子の知的な遅れは次第に重くなってくる。四十五分間、何もわからないまま座

っているのは、息子にとつてもかなり辛いだろう。

十一月、玄関のわずかな段差から落ちただけで、足の甲を骨折してしまった。抗がん剤の影響で、骨も脆くなっている。

「これ以上、普通小学校へ通うのは無理だ。養護学校へ転校しよう」。

覚悟が決まった。県内にある、複数の養護学校を見学させてもらう。重度の重複障害のお子さんも多く、普通小学校とは、大きく異なる雰囲気、息子は全く心を開かない。あきらめずに見学した新設の養護学校。赤い屋根の平屋建ての校舎には、太陽の光が降り注いでいる。先生たちも明るくて、ことばのないお子さんも多いのに、笑顔があふれている。息子も、初めて、校内をゆつくり見て回っている。

「ここに決めたい」。学区外の通学は認められなかったので、四月の入学までは学区内に転居することを条件に、入学手続きを進めてもらう。購入して二年の家を買い替えて引っ越しした。養護学校に近いばかりではなく、入退院を繰り返している小児医療センターに近いことも、決断のひとつだった。その甲斐あつてか、それからの小、中、高等部までを元気に通うことができた。

職場としての学校

父の背中を見て育ったせい「学校の先生」になりたかった。

中学、高校の免許を取得したものの、教員採用試験が受からない。

小学校の臨時免許を取得して、数年間、代用教員として勤務した。その後は、闘病する息子とともに、長い年月を生きてきた。

息子が旅立って八年。主人が退職する三月の新聞の求人広告。目に留まったのは「放課後児童クラブ支援員」。私は、六十六歳。ブランクは四十年。それでも、思い切って応募した。採用が決まり、昨年の四月から働き始めた。両親に応援してもらった教員資格が役に立った。校庭で走り回る子どもたちの姿、音楽室から聞こえてくる歌声。息子にはかなわなかったそれらの時間。勤務する小学校までの通り道には、息子が通った養護学校の赤い屋根が見える。

息子と共に生きてきた年月を力に代えて、もうひと頑張りしてみよう。やっぱり、学校が大好きだ。

学 校

寄り添う

鹿住 敏子

長い闘病生活の末に、息子が旅立って八年。小児がんの中の「脳腫瘍」だったために、治療によって背負うことになった後遺症も大きなものだった。そんな中でも懸命に頑張ってくれる息子に、母親の私ができることは、寄り添ってともに生きること。今、振り返ると当たり前の大切なことが、まったく見えなくなっていた。息子が発症した時に三十歳だった私は、泣いてばかりいた。それは、息子に対する思いも大きい。人生が失われてしまったような自分への悲しみでもあった。そんな私に、喝をいれてくれたのは、秋田の母だった。手術後、初めての帰省。変わり果てた孫の姿を見て、感じたであ



ろう思いははかり知れない。それを、まったく顔には出さず、元気な頃と同じように迎えてくれた。外に出て走り回ったりできなくなってしまった息子に、梁はりから兵児帯へこおびをぶら下げて、ブランコを作ってくれた。帯を広げると、息子のお尻がすっぽりと収まり安定感も良い。そっと背中を押してあげると、ゆらゆらと揺れて、息子は楽しそうに笑った。手術後に、こんなに笑顔の息子を見たのは初めてだったかもしれない。

「今、一番苦しくて頑張っているのは雄樹なんだよ。母親がめそめそ泣いてばかりでどうする。おまへは、自分のことがかわいそうなんじゃないのか？」母の厳しい言葉に、ひとことも言い返すことができなかった。私に背中を向けて洗い物をしながら、そう言う母も泣いていたかもしれない。自分の感情に溺れていては、心から息子に寄り添うことなどできない。こちらの寄り添い方で、息子は笑顔になれる。「心や身体の痛みを、そっと和らげるような話し方や接し方。ほんの少しでも、いい気持ちになってくれたらもつといい」。

息子が遺のこしてくれた「寄り添う」ことの意味を大切に、ここから先を生きていきたい。何よりも私自身が、友やたくさんの人に寄り添ってもらいながら、今を生きている。

選

評



タイトルからが作品です

内館 牧子

今回小説の部で最終選考に残った6名は全て男性で、エッセイ・紀行文の部の4名はすべて女性です。一般的に、公募では女性の応募者が非常に多いと聞きますが、このふるさと秋田文学賞は、以前から男性が圧倒的に多いのです。もちろん、これは選考には何の関係もありません。ただ、秋田には男性をそそる魅力があるのかもしれない。そこをさぐって率直に書くのも、興味深いと思います。

毎回、選考会は各委員の評点がバラつき、文学賞と佳作を選ぶのにカンカンガクガクの議論をするのですが、今回は小説もエッセイも各委員が一致し、すぐに決まりました。

小説の部から行きますと、北原岳さんの「彩生さいせいの祈り」がフルマークで文学賞でした。ただ、私はあかりという女性に生ま身の人間を感じにくかった。戦争中でありながら「私は生き

ていたい」と言うなど強さもあるのですが、どうもお人形のように、生きている人間の血潮を感じにくいのです。

この作品はテーマをもっと絞り、土崎空襲であかりを失うという一点で、戦争の悲惨さを書く方法もあったと思います。タイトルの「彩生」は造語のように思い、広辞苑や漢和辞典等六冊ほど調べました。やはり造語らしく、どれにも出ていません。造語は力がないことも多く、私は使用をあまり勧めません。

佳作の「星をあつめて」も高得点を得ています。予測のつく人情ものですし、田舎の老人と少女、そして東京で失敗した男のステレオタイプな物語です。でも、それが読ませる作品になっている。これは、登場人物のキャラクターを練って、書き分けられているからだと思います。小説を書く上で、人物描写は何より大切なことだと、私は考えています。

入賞できなかった「仙北道へ」はあまりにも話が盛り沢山すぎました。また「エーメと川反をこの胸に抱いて」は、時系列で状況を知らせるだけになっており、小説としてはつらい。「妙技会の呪縛」も情報ではなく、妙技会に出場する人間のプレッシャーを、もっとリアルに書いていたら迫力が出了。「サマーワンダー」も登場人物のキャラクターがあいまいでした。

この登場人物が何のためにいるのかわからなかったりして、感情移入が難しかった。

エッセイ・紀行文の部では笹リンさんの「男鹿っ子ナマハゲ論」が文学賞を受賞しました。私は非常に面白く読みましたし、文章も構成もうまく、人物をとらえる目線もいい。たとえば、子供の頃から年に一度やってくるナマハゲという神は、今も自分の中に生き続けている。そして「渋谷で感じた居心地の悪さはこれに尽きる」と書きます。とてもいい。たった一点、何とも残念だったのは、ラストでナマハゲの絵を描いた中学生たちに「遠くの街で来訪神のそろい踏みに会えたよ！ 男鹿っ子のみんな、ありがとう」と書いたこと。この二行でぶち壊しです。最後にこういう呼びかけを書く人は非常に多いのです。例えば「お母さん、いつ迄も元気でいてね」とか「女房殿、これからよろしく」とかで締めてぶち壊しています。これはエッセイではない。手紙かメールか電話で伝えて下さい。

佳作の「学校」はよく書いていました。父・息子・自分自身、学校をめぐる三様の思いが、決して情緒過剰にならず、うまく紡ぎ合わされています。

入賞を逃した「しのぶ」は、話を時系列に詰め込みすぎです。いっそ「父と自分の差」に絞る手もあったように思います。そして、「つづく繋がる端縫い衣装が結ぶわたしたちの物語」

は、かなり考えてつけたタイトルだと思いますが、委員たちからまったく評価されませんでした。内容にしても、その仕事にたずさわる本人が書いたテーマの良さが、作品にもっと出たはずで、残念です。

応募作の多くに言えることですが、タイトルがひどい。タイトルからが作品なのです。内容をタイトルで説明するのではなく、ふさわしい一言をもっともって考えて下さい。

〈脚本家 秋田市出身〉



画竜点睛

塩 野 米 松

『題名のこと』

最終候補に残った小説6本とエッセイ4本が届いた。この時点で、私たちには手がかりはない。原稿には題名、本名、ペンネーム。住所、年齢、職業が書かれている。並べてみて、「今年は大丈夫かな?」と思った。題名はとても大事だ。内容を暗示し、期待を抱かせる。そのための工夫が凝らされたものが今回もないのだ。50枚もの原稿を終わりまでしっかり書き上げているのに、題名がこれでは損だ。題名は魂を生かす最後の一点だ。本屋で、これでは背表紙を見ても手を伸ばさないだろう。充分に考えて欲しい。

『小説の部』

ふるさと秋田文学賞は最終選考委員全員一致で「彩生さいせいの祈り」。舞台は秋田師範が男女合併の時期の女子部。戦争末期の話だ。出征していく男達と直前に結婚する友人。家族に戦死者がいる人も多い。こうした中で一人の同級生に憧れる女性が主人公。目指す姿を話し、自分を磨く。戦時中の青春像だ。敗戦の日、8月15日未明、最後の空襲が土崎つちさきを襲う。時期の設定、秋田市という場所。みごとに仕組みである。時間の行き来、エピソードの転換も巧みである。

「文学的と思われるクサイ表現、美的に凝った文」を挟み込んで効果を狙っているが不要。ストレートに描いた方がいい。凝った題名も銜てらいが見えて損。

佳作は「星をあつめて」。おもいが大曲の花火師の家が舞台。女の子の父は腕のいい職人だった。だが花火工場の火災で亡くなった。残された母親と娘は東京へ。高校卒業を待つて娘は花火師になるため大曲へ。父の友人の花火工場で修業を始める。そこにフリーランスの記者が花火師の取材に。あまりに典型的な構成だ。言葉も「無邪気に笑う」「老いてゆく寂しさ」「啖呵たんかを切って会社を辞めた」というふうに紋切り型。どうしたものかと思ったが、読ませる力がある。構成や言葉選びを間に合わせてやらずに、工夫すれば、いいものを書けるのでは。期待を込め

て佳作に。次回待ってます。

「サマーワンダー」はおもしろい試みの作品だ。飼い主の少女と犬の体が入れ替わってしまう。誰も気づかぬが、お祖父ちゃんだけは知ってる感じ。ありそうな変身物語のようだが、習性を活かした描写、犬になってわかった人間界のこと。同級生、父母。人物配置とキャラクター。洞察が深く、とてもうまい。期待大。

『エッセイ・紀行文の部』

ふるさと秋田文学賞は「男鹿^{おが}つ子ナマハゲ論」。他県に住む人が故郷に寄せる思いはいつもエッセイの種火になる。「郷愁」は永遠のテーマだ。男鹿出身の著者が子どもの頃のナマハゲの話を交え、今の心境も織り込む。安心して読める文。修練の跡が見える。場面の切り替え、つながが上手。

佳作は「学校」。父の当直の日、学校へくっついて行ったときの思い出。障害を持った息子の学校問題。息子が亡くなった後に勤めた児童クラブの支援員。三話のオムニバス。こうした体験を書くときに背景の地名、登場者の年齢などを描き込んでおくと、読み手の共感が得られ

やすいもの。地名は情報豊かなもの。この2作も題名は工夫が必要。

選外の作品の欠点は、詰め込み過ぎ。調べたことを生のママ使ったため、説明的になってしまっている。知っていることを全部見せるのではなく、ほんの少し挟み込むことで効果が出る。原稿を最後まで書き上げてくださったみなさんに拍手。まずはそこから始まる。かなり水準が上がっています。次回を期待しています。

〈作家 仙北市（旧角館町）出身〉



もっとパッションが欲しい

橋本五郎

私は新聞記者です。事実をいかに正確に報道するか、いかに分かりやすく伝えるかという商売です。文学については愛好者にすぎません。ですから文学作品に対する確な評は無理です。多分に感情の赴くままの批評しかできません。昨年は、塩野さん、内館さんの鋭い選評を聞きながら、自分はなんて甘いんだろうと反省しました。今回は厳しく読まなければと思います。その結果、最終選考会では両先生より厳しくなりました。

そんな中でも小説の部では、両先生と同じように「彩生さいせいの祈り」を高く評価しました。この国が空襲に襲われている戦時下でも、まぎれもない一つの青春があつたのです。思春期の淡く、抱きしめたくなくなるような汚れなき世界が描かれていることに感動しました。先生になりました。その夢を持ち続けることの大切さも描かれています。

それにしても、作者の北原岳さんは49歳ですから自らの体験ではありません。おそらく絶対伝えたいと思った肉親がいたのでしょうか。それを大事に思っただけで再現したのでしょうか。自分の経験は極めて限られています。想像力で補うしかないのですが、想像力には当然その人の価値観や夢が入り込みます。私にはそれが好ましく思われました。

佳作の「星をあつめて」はお二人の先生より厳しい評価となりました。私は大曲の花火おまがりを毎年欠かさず見に行っています。花火作りの現場にも赴き、秋田放送の特別番組を作ったこともあります。それでも、この作品から多くのことを学びました。しかし、作品としては、予想された展開で盛り上がり欠けているように思いました。小説なのですから、もっと大胆にダイナミックに運んだらいいのです。それこそ、大輪の花火を打ち上げる気持ちで書いて欲しいと思いました。

エッセイ・紀行文の部の「男鹿おつ子ナマハゲ論」は、母親にナマハゲ軍団に密告されて不意打ちを食らって逃げ惑っているさまをよく描いています。長女が息をひそめて押し入れに隠れているのを祖母がナマハゲに教えているという光景も目に浮かびます。そしてその後の文章が いいのです。「そうやって子供はいつも親たちに裏切られているのに、恨んだり文句をぶつけ

たことは一度もなかった。何故なのか、その答えはただ一つ。男鹿の子供たちにとってはナマハゲは年に一度やつてくる神様そのものだったのだから」。

エッセイ・紀行文の部で両先生と評価が違ったのは、「学校」より「つづく繋がる端縫い衣装が結ぶわたしたちの物語」を高く見たことです。学校の当直には私にもいろんな思い出があります。好きな先生が当直のときには夜みんなで押しかけました。夜遊びできるチャンスだったからです。ですから、このエッセイももっと膨らみがあつた方がいいと思いました。西馬音内盆踊りと広島原爆、そして土崎の空襲を繋げることの是非はあろうが、「つづく……」での想像力が私には好ましく思われました。

それにしても、この長いタイトルはどうでしょう。最初は、わざと目を引くように長くしたのかなと思ったりもしましたが、単なる説明にすぎません。タイトルの拙劣さについては去年も両先生からご指摘がありました。タイトルとは、簡潔に作品の本質を凝縮したものでなければなりません。テレビなどで「つかみ」と言いますが、タイトルで読む人の心を鷲掴みにするようであればいいません。たとえば小説の部の「妙技会の呪縛」は竿燈を描いていますが、私だったら「竿燈ほじなし」というタイトルにします。

もうひとつ、佳作も含めて共通しているのは、なぜ自分はこれを書くのかという、やむにやまれぬ衝動があまり感じられないことです。応募するから書く。それもあるでしょう。しかしそこには、書かずにはいられないというパッション（情熱）がなければいけないと思います。自分の中でずっと育んできた思い、内部で発酵してきたもの、それが思わずほとばしり出るところで初めて読む人の心を打つのではないのでしょうか。

〈読売新聞特別編集委員 三種町（旧・琴丘町）出身〉

一次選考委員 寄稿

完成と未完成

柴 山 芳 隆

芭蕉の『奥の細道』の中で最もよく知られた句の一つである「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の初案は「山寺や石にしみ付く蟬の声」であった。しかし、その後旅を続けている間にこの句は「淋しさや岩にしみ込む蟬の声」と大幅に手が加えられ、最後に「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」となって『奥の細道』に発表された。初案から成案までの間に大幅な推敲がなされているが、これでこの句は完成したのである。つまり、これ以上手を加えると作品は壊れていくだけなのである。

『奥の細道』からもう一句取り上げてみると、「五月雨を集めて速し最上川」も初案は「五月雨を集めて涼し最上川」である。最上川の本質は「涼しさ」にあるのではなく「速さ」にあ

ると見抜いた眼力が、芭蕉が俳聖と仰がれるゆえんに通じているのであろう。

芭蕉が後世に残した作品は千句に満たないが、実際の句稿はその何倍にも及んでいるに違いない。もしかしたら一〇倍を超えているのかもしれない。そうした多数の句作の中から、芭蕉自身がこれは完成と判断したものだけを書き残し、あとは皆捨ててしまったのではなかろうか。俳句では「多作多捨」とはよく言われることである。

江戸の俳人としては与謝蕪村や小林一茶も有名で、とくに一茶の句のファンは随分と多い。むろん、それはそれで結構なことだが、一茶の作品は一万句以上知られており、必ずしも文学的価値の高くない句も少なくない。一茶は「多捨」ということにあまり関心がなかったため、未完成と評せざるをえない作品が現在まで伝わってしまったのであろうか。この辺が、俳聖という尊称が付くか付かないかの分岐点になったような気がしないでもない。

いずれにせよ、短歌、俳句、川柳、場合によっては詩まで含めて、短詩型の文学作品というのは完成するのである。

一方で、散文作品、とくに小説は完成するということがない。井上靖は、この小説が完成したら出版しようと考えたらその作品は永遠に世に出ることはない、と述べている。原稿を出

版元に渡したその瞬間から、あそこはこうすればよかった、ここはこうすべきであったと悔やむのが、小説を書く人の常と言ってよい。自分の小説を多くの人に読んでもらいたいと思ったら、日時を自分で決めて、その時点で最高と判断したものを出版社に渡すしかないのである。長編小説ではことさらにそうだと言えよう。

小説の分類の仕方はいろいろあるが、短編と長編に分けるケースは結構多く見られる。そして、その場合の基準はほとんどが分量の違いに着目している。しかし、木村毅は、短編と長編の違いは作品の長さという量的な違いによるのではなく、質的な差異だ、と強調している。筆者もこれに賛成である。つまり、逆説的な言い方をすれば、長い短編もあるし短い長編も存在するということである。

芥川龍之介は短編の名手としての評価が非常に高く、その評価はきわめて適切なものと考えるが、その芥川の短編ですら、完成・未完成という視点で読むと、やはり完成とは言いがたい部分があったりもする。

よく知られているように、『鼻』は芥川の出世作で、夏目漱石にも激賞され、高校の教科書でも盛んに取り上げられている作品である。筆者も、教員時代には何度もこの名作を授業で取

り扱った。

この作品は非常に完成度が高く欠点らしきものはほとんど見当たらないが、ただ一カ所、傍観者の利己主義について作者の見解を直接述べている終盤近くの短い段落だけはやはり弱点とみなす向きが多い。短編の名手芥川作品にしてそうであることから類推できるように、小説では、完成という段階にはなかなか到らないのである。

〈作家 秋田市在住〉

秋田県の読書活動推進施策

～県民運動の視点で読書活動を推進～

秋田県では、全国に先駆けて読書条例「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し（平成22年4月1日施行）、また、毎年11月1日を「県民読書の日」と定めています。

「第3次秋田県読書活動推進基本計画」（令和3年度から7年度まで）に基づき、「生涯にわたって読書に親しみ、心豊かに」という基本目標のもと、県民がライフステージに応じて読書に親しむ活動を推進しています。



©2015 秋田県んだっちゃん

《読書活動推進体制》

●秋田県読書活動推進基本計画の進行管理

秋田県読書活動推進本部
《知事を本部長とし、各部局長で構成》

●施策の一体的推進

秋田県読書活動推進連絡会
《庁内関係12課所で構成》

文化振興課	次世代・女性活躍支援課	
長寿社会課	障害福祉課	
教育庁総務課	幼保推進課	義務教育課
高校教育課	特別支援教育課	生涯学習課
図書館	生涯学習センター	

●市町村との協働による推進

秋田県読書活動推進連絡協議会
《県と25市町村で構成》

県観光文化スポーツ部文化振興課
県教育庁総務課
県生涯学習課
市町村企画担当課
市町村教育委員会読書活動推進担当課

《令和6年度 県の読書活動推進の取組例》

○読書啓発イベントの開催

「県民読書の日」にちなみ、11月3日（日）に秋田キャッスルホテル（秋田市）で開催したイベントには、約400名の方々に参加いただきました。

ステージイベントの第1部「第11回ふるさと秋田文学賞」表彰式では、受賞者4名の表彰に続き、選考委員の内館牧子さん、塩野米松さん、橋本五郎さんによる講評をお聞きいただきました。

第2部「読書の杜トークライブ」では、お笑いコンビ「ハリセンボン」の箕輪はるかさんと、秋田市出身でフリーアナウンサーの堀井美香さんにより、読書を好きになったきっかけやお薦めの本などについて軽妙なトークが繰り広げられました。

このほか、会場には「本の交換会」コーナーなども設置し、多くの人に読書一色の空間をお楽しみいただきました。

参加者からは、

- ・様々な分野の方々が登場され、読書の良さを多方面から発信してくださり、とても楽しい時間となりました。きっと多くの方が「本と触れ合う時間を増やそう」と感じたことと思います。
- ・選考委員の選評や受賞者の言葉を聞き、作品を書き上げることの難しさに驚きました。

などの感想が寄せられました。



○読んだッチ・リレー文庫

子供たちの読書環境を充実させるため、家庭で読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、希望する保育所等に贈って子供たちに読書の楽しさをリレーする取組です。

平成23年度から令和5年度までの13年間で1,259名の方々から寄贈があり、937か所の施設に届けられ、子供たちに読書の楽しさがリレーされています。

保育所、幼稚園、こども園、放課後児童クラブ、公民館、体育館、病院、店舗など、子供たちが集まる県内の施設ならどこでも設置できます。

設置のお申込みは、随時受付していますので、是非御利用ください。



読んだッチ・リレー文庫（例）

○「あきたブックネット」による情報発信



あきたブックネット公式X



あきたブックネット公式YouTubeチャンネル

県公式サイト「美の国あきたネット」内の特設ページ「あきたブックネット」では、著名人がお薦めする本の紹介や県の取組など、読書を身近に感じられるような情報を発信しています。

また、X（旧Twitter）では、読書に関する県内外の新しい情報を紹介しているほか、YouTubeでは、ふるさと秋田文学賞受賞作品の朗読などを公開していますので、是非御覧ください。

特設ページ「あきたブックネット」

～読書に関する情報を発信しています～

○「あきたブックネット」（「美の国あきたネット」内）

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/31730>

過去の「ふるさと秋田文学賞」受賞作品もこちらから



作品募集要項・実施状況



第11回ふるさと秋田文学賞 作品募集要項

●募集作品

- テーマ 秋田県が舞台であること、又は秋田県内の自然・歴史・風土・文化・人物・物産などを題材とする。
- 部門 「小説の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内
「エッセイ・紀行文の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙10枚以内

●応募資格

年齢・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

●作品募集期間

令和6年4月1日（月）から令和6年7月31日（水）まで
※郵送（当日消印有効）又は持参（平日午前9時～午後5時）してください。

ご注意
送付部数は
4部（コピー可）

●賞

小説の部	ふるさと秋田文学賞 ……1編（正賞/賞状 副賞/賞金50万円） ふるさと秋田文学賞（佳作）……1編（正賞/賞状 副賞/賞金5万円）
エッセイ・紀行文の部	ふるさと秋田文学賞 ……1編（正賞/賞状 副賞/賞金20万円） ふるさと秋田文学賞（佳作）……1編（正賞/賞状 副賞/賞金2万円）

※受賞者には、受賞作品集を贈呈します。

●選考委員

- 1次選考委員 柴山 芳隆 氏（作家 秋田市在住）
最終選考委員 内館 牧子 氏（脚本家 秋田市出身）
塩野 米松 氏（作家 仙北市：旧角館町出身）
橋本 五郎 氏（読売新聞特別編集委員 三種町：旧琴丘町出身）（五十音順）

●応募規定

- 原稿 ・原稿は縦書きとし、電子データでの応募は不可とします。（ワープロ原稿はA4判横長の白紙に30字×40行の縦書きで印字し、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記してください）
・日本語で書かれた自作未発表のものとし、
○表紙 ・応募作品には次の事項を明記した表紙をつけてください。
①応募部門、②題名（ふりがな）、③原稿用紙換算枚数、④氏名（ふりがな）、ペンネーム（使用する場合は）、⑤郵便番号、⑥住所、⑦電話番号、⑧年齢、⑨性別、⑩職業（学生の場合は学生と記入、任意）、⑪引用又は参考にした資料・文献、⑫募集を知ったきっかけ（過去に応募、チラシ、公募ガイド、新聞、ウェブサイト名など）
○あらすじ ・「小説の部」は、200字程度にまとめた「あらすじ」を表紙の次のページに添付してください。
○応募部数 ・作品は4部お送りください。（コピー可。必ず通しページ番号を付け、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩をクリップ等で綴じてください。）
○その他 ・表紙、ワープロ原稿の様式は、県公式サイト「美の国あきたネット」でダウンロードすることができます。
・応募作品は一切返却しませんので、あらかじめ御了承ください。
・各部門への応募は一人1編に限ります。
・他の文学賞やコンクールに同時期に応募している作品の応募は不可とします。
・応募作品を生成AIで作成することは不可とします。
・盗作など当該作品のオリジナリティが認められないと判断した場合は受賞後であっても賞を取り消します。
・作品の審査及び選考についての問合せには応じません。
・表紙に記入された個人情報は、ふるさと秋田文学賞に関する連絡・発表以外には、使用しません。
・最終選考結果発表時には、受賞者及び最終選考候補作品の作者の氏名（又はペンネーム）、住所（都道府県・市町村名まで）を公表します。
なお、作品の応募をもって承諾を得たものとします。
・受賞作品の著作権は主催者に帰属します。ただし、主催者は著作者本人の意向を尊重し、作品を広められるよう配慮するものとします。

●選考結果の発表

- ・令和6年10月中旬、受賞者に直接通知するとともに、県公式サイトで発表します。
・表彰式は、令和6年10月下旬～11月上旬開催予定の読書活動啓発イベント（秋田市で開催）で行います。

●応募・問合せ先

〒010-8572 秋田県秋田市山王三丁目1番1号
秋田県観光文化スポーツ部 文化振興課 読書活動・文化芸術推進チーム
「ふるさと秋田文学賞」担当
電話 018-860-1530

第11回ふるさと秋田文学賞の実施状況

1 応募状況等

- ・応募総数 155

〔内訳〕 小説の部 86、エッセイ・紀行文の部 69
(県内 59、県外 96)

2 最終選考候補作品 ※応募順

○小説の部（6作品）

「仙北道へ」	奥 祐治（福井県大飯郡おおい町）
「エーメと川反をこの胸に抱いて」	木村 泰崇（滋賀県犬上郡多賀町）
「妙技会の呪縛」	工藤 管（富山県富山市）
「星をあつめて」	矢部 郁（東京都八王子市）
「サマーワンダー」	小川 ハク（東京都杉並区）
「彩生の祈り」	北原 岳（愛知県名古屋市）

○エッセイ・紀行文の部（4作品）

「男鹿っ子ナマハゲ論」	笹 リン（神奈川県相模原市）
「学校」	鹿住 敏子（埼玉県白岡市）
「しのぶ」	早瀬 ルイ（東京都調布市）
「つづく繋がる端縫い衣装が結ぶわたしたちの物語」	武智 弘美（兵庫県神戸市）

3 受賞作品

○小説の部

＜ふるさと秋田文学賞＞	
「彩生の祈り」	北原 岳
＜ふるさと秋田文学賞佳作＞	
「星をあつめて」	矢部 郁

○エッセイ・紀行文の部

＜ふるさと秋田文学賞＞	
「男鹿っ子ナマハゲ論」	笹 リン
＜ふるさと秋田文学賞佳作＞	
「学校」	鹿住 敏子

第11回ふるさと秋田文学賞応募者内訳一覧

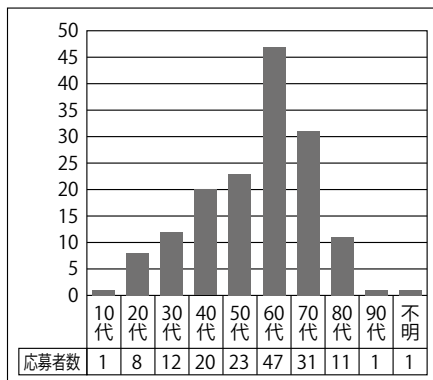
部門別応募数(編)

小説	86
エッセイ・紀行文	69
計	155

男女別応募者数(人)

男	94
女	51
記載なし	10
計	155

年代別応募者数(人)



都道府県別応募者数(人)

県内	59
県外	96
北海道	4
青森県	2
岩手県	4
宮城県	3
山形県	1
福島県	0
茨城県	6
栃木県	1
群馬県	1
埼玉県	6
千葉県	7
東京都	21
神奈川県	8
新潟県	2
富山県	1
石川県	0
福井県	1
山梨県	0
長野県	1
岐阜県	1
静岡県	1
愛知県	5
三重県	0
滋賀県	3
京都府	2
大阪府	6
兵庫県	3
奈良県	0
和歌山県	0
鳥取県	0
島根県	0
岡山県	0
広島県	2
山口県	0
徳島県	0
香川県	1
愛媛県	2
高知県	0
福岡県	1
佐賀県	0
長崎県	0
熊本県	0
大分県	0
宮崎県	0
鹿児島県	0
沖縄県	0
計	155

第11回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日 令和七年三月二十一日

発行 秋田県

編集 秋田県観光文化スポーツ部文化振興課

電話 〇一八（八六〇）一五三〇

表紙

秋田県にかほ市 九十九島